



Title	ロシア革命と地方ソヴェト権力：一党制政治システムの形成によせて
Author(s)	西山, 克典; Nishiyama, Katsunori
Citation	スラヴ研究, 32, 153-182
Issue Date	1985
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5150">https://hdl.handle.net/2115/5150</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113246.pdf



# ロシア革命と地方ソヴェト権力 — 一党制 政治システムの形成によせて—

西 山 克 典

## 目 次

- 序 研究課題の設定
- I. 地方ソヴェト権力の樹立
- II. 地方ソヴェト権力の危機
- III. 「一党制」への傾斜
- 結びにかえて

## 序 研究課題の設定

ロシア革命は政治諸党派の活動をはじめ、軍隊における兵士、都市と工業コロニーの工場労働者、郷村共同体の農民、辺境被抑圧民族の民衆それぞれの自立的運動の複合過程として展開し、その革命権力は革命的民衆の結集するソヴェトに体现された。しかし、革命が内戦と干渉戦に突入し、戦時共産主義を経てネップに移る頃には、革命権力の政治的中枢はもはやソヴェトではなく、権力を排他的に独占した一つの党、共産党に転換していた。本稿は、この革命過程におけるソヴェトから党への政治中枢の転換を一党制政治システムの形成の問題として捉え、1918年春から1919年初めの地方ソヴェトに焦点をあてつつソヴェトに対して一つの党、共産党がいかにか「統制」と「指導」の政治システムを形成していったかを叙述し、分析することを課題とする。

このような課題にてらして研究史を顧みると、ソ連邦では革命の基礎過程が、共産党の決議・決定・政策から演繹的に叙述され、ソヴェト権力に自立的動向を示した地域民衆は、党の「指導性」という観念の下では、「町人根性的」「クラーク的」「ブルジョワ民族主義」「俗物的」とされ、その内在的把握が阻げられるとともに、共産党以外の諸党派は党の戦略・戦術・政策からその「破産」と「崩壊」が導出され、共産党による一党制形成の歴史的論理が構成されてきた。従って、1918年の地方ソヴェトは旧権力機関に代って統治機構として整序化される過程が制度史的に叙述されるにとどまり<sup>1)</sup>、地方ソヴェト権力の経た危機と一党制への再編過程が独自の研究対象とされることがなかった。また、スターリン批判後、エス・エルをはじめ「小ブルジョワ諸党」の研究が活況を呈し、60年代後半から一党制形成の画期をめぐり論争が行われ、そこでは、1918年春—夏に一党制成立を求める従来の説と、1920—21年に画期を求めるギムペリソンの説が対立したが、一党制

1) А. И. Лепешкин, Местные органы власти советского государства (1917—1920 гг.), М., 1957.

概念の解釈と共産党の他党派への対応を指標とした論争に終始した<sup>2)</sup>。

欧米では、首都の諸事件、諸政党の動向、制度・政策の展開を中心にロシア革命を把える傾向が長く支配的であり<sup>3)</sup>、その研究を貫いている「独裁」への強い関心は、共産党に内在する組織論や、ソヴェト権力の諸政党に対する行政的弾圧に説明を求めたり<sup>4)</sup>、「二重革命」の枠組で考えられてきた。「二重革命」論では、官僚的国家組織に対する「アナーキー」な人民諸運動がボリシェヴィキを権力につけ、逆に自らが抑圧と統制の対象とされることによって、より強固な官僚的独裁国家が形成されたとするのである<sup>5)</sup>。しかし、1960年代末から「ハイ・ポリテックス」中心にロシア革命をとらえる「上からの史観」が批判され、「下から」「地方から」ロシア革命を再考する傾向が生れてきた。J. キープは「中心主義的偏向」を批判し、地域研究の必要性を提起し、G. ギルは地方情勢の中央へ与えたインパクトを強調し、T. ウルドリックは革命期の「民衆 crowd」概念の再考を求めた<sup>6)</sup>。最近では、M. ベルンシュタムが民衆の「自立性 независимость」に強い関心を払い、R. サーヴィスは革命期のボリシェヴィキの「民主主義的アナーキズム」が内戦の困難のなかで「厳格な中央集権主義」に変貌したとし、その際、地方からの下からの要因を重視する考えを示した<sup>7)</sup>。欧米では、「民衆」概念の再検討を求めつつ、革命過程における「下から」「地方から」の契機を強調しつつ研究が進んでいるといえる。

日本では、諸政党の動向から一党制形成の論理と実証がたどられ<sup>8)</sup>、ソヴェト権力の政策を中心に都市と農村、労働者と農民の対抗関係が問題とされ、ソヴェト権力の整序化過程が叙述されてきた<sup>9)</sup>。石井氏の最近の研究は、権力中枢を占めた共産党の政策、とりわ

2) E. Г. Гимпельсон, Из истории образования однопартийной системы в СССР. 《Вопросы истории》, 1965, №. 11; Л. М. Спири́н, Историография борьбы РКП (б) с мелкобуржуазными партиями в 1917-1920 гг. 《Вопросы истории КПСС》, 1966, №. 4; Б. М. Морозов, Обобщение опыта руководства партии советским строительством в первые годы диктатуры пролетариата, там же; П. Н. Соболев, К вопросу о возникновении однопартийной системы в СССР, 《Вопросы истории КПСС》, 1968, №. 8.

3) E. H. カーの大著『ボリシェヴィキ革命』は専ら国家権力に関わる指導グループの分析と制度・政策に関心を集中し、彼のロシア革命研究は何よりもボリシェヴィキ革命として叙述されている。この点をドイツチャーが鋭く指摘した。I. Deutscher, “E. H. Carr as Historian of Soviet Russia” *Soviet Studies*, 1955, No. 4, pp. 343-5.

4) L. Schapiro, *The Origins of the Communist Autocracy*, London, 1956.

5) F. Borkenau, “State and Revolution in the Paris Commune, the Russian Revolution and the Spanish Civil War,” *Sociological Review*, 29 (1939), p. 67.

6) J. Keep, “October in Provinces” in R. Pipes ed., *Revolutionary Russia*, Harvard U. P., 1968; T. J. Uldricks, “The “Crowd” in the Russian Revolution: Toward Reassessing the Nature of Revolutionary Leadership,” *Politics and Society*, 1974; G. J. Gill, *Peasants and Government in the Russian Revolution*, London, 1979.

7) М. С. Бернштам, ред., Независимое рабочее движение в 1918 году, документы и материалы, Париж, 1981; Его же, ред., Урал и Прикамье, ноябрь 1917- январь 1919. документы и материалы, Париж 1982; R. Service, *The Bolshevik Party in Revolution. A Study in Organizational Change 1917-1923*, McMillan Press, 1979.

8) 和田春樹「ロシア革命における統一戦線」『思想』1967, 9, No. 519; 高岡健次郎「ロシア革命と一党制の形成」中野他編著『スターリン問題研究序説』大月書店, 1977年所収。

9) 溪内謙『ソヴェト政治史』勁草書房, 1962年; 藤田勇「ロシア革命における国家と法—その一側面に関する予備的考察—」江口朴郎編『ロシア革命の研究』1968年所収。

け対農民政策と、その党の「指導集団」と「活動家大衆」との「指導—被指導関係」からロシア革命における「党＝「国家」体制」の成立を論じている<sup>10)</sup>。日本では諸政党間の関係と中央権力の制度・政策史から、言はば中心主義的にロシア革命とソヴェト政治史が研究され、地方は中央の政策・制度の波及し実施される場として、民衆は権力と諸政党の政策宣伝対象あるいは「支持基盤」として位置づけられてきた。ここでは革命期の地方と地域民衆の有した社会的運動量が自覚されずに、従って1918年の地方ソヴェトの政治構造とその危機、さらに一党制への転換過程が独自の研究対象とされることがなかった。

以上のような研究動向をふまえ、本稿は従来の主要な研究分野であった共産党を中心とする諸政党の関係史と中央の制度・政策史から、地方ソヴェトへ視点を移し、そこでの一党制政治システムの形成過程をさぐるものとするものである。即ち、首都ペトログラードの十月武装蜂起によって地方にソヴェト権力が樹立されていく1917年冬—1918年春から、1919年春の第八回共産党大会までを時間的枠組とし、中央農業地帯とヴォルガ中流地帯の地方ソヴェトを舞台として、ロシア革命を担った地域民衆の自立的運動とそれと関連するポリシェヴィキや左翼エス・エルなどの革命諸党派や無党派の動向に焦点をあて、言わば、自立的な地域民衆の諸運動の社会学との関連で、地方ソヴェトの政治構造とその危機、さらに一党制への転換過程を分析する。

## I. 地方ソヴェト権力の樹立

1917年10月24-26日の首都ペトログラードでの労働者・兵士の武装蜂起と第二回全露労兵ソヴェト大会は、臨時政府を打倒し、「地方における全権力は労兵農ソヴェトへ移行する、労兵農ソヴェトは真の革命秩序を確保せねばならない」と呼びかけた<sup>1)</sup>。首都のこの十月武装蜂起は、地方の政治情況に衝撃を与え、地方における権力的空隙を生み、地方政治勢力の再編と地域からの自立的権力の創出を促す決定的要因となった。翌1918年1月の憲法制定議会の解散と第三回全露ソヴェト大会は、この過程を一層促進し<sup>2)</sup>、1918年2-3月期には、そのような政治的変動の総括として、各地で県郡レベルでの地域的なソヴェト権力の樹立は一応の完了をみた。

この「ソヴェト権力の凱戦的勝利」期とソ連史学で慣用されている一時期において、地方ソヴェト権力の樹立は地域の革命諸勢力の統合過程でもあった。それは都市労兵ソヴェトが主導し、農民大会や農民ソヴェトを合流させつつ進行した例が多いが、労働者層が薄く社会勢力として弱い地方都市では、守備隊兵士がソヴェト権力樹立に大きな役割を果たした<sup>3)</sup>。また、一連の郡で農民大会や農民ソヴェトの先導の下で、ゼムストヴォなどの他の

10) 石井規衛「国家と農民—食糧独裁令から貧農委員会の改造まで—」『土地制度史学』XXIII-2, 1981; 同「革命ロシアにおける党＝「国家」体制の成立」『社会運動史学』9, 1981年; 同「ロシア革命からソヴェト国家へ—指導集団と活動家大衆(1917年9月—1918年5月)—」『歴史学研究』1983. 4. No. 515.

1) 《Октябрьское вооруженное восстание в Петрограде》, документы и материалы М., 1957, №. 601.

2) 第三回全露ソヴェト大会で採択された「勤労被搾取人民の権利宣言」は第一条で、「ロシアは労兵農ソヴェトの共和国と宣言される。中央及び地方における全権力はこれらのソヴェトに属する」とソヴェト権力の樹立を謳っていた。《Триумфальное шествие советской власти》, сб. документов и материалов, М., 1963, [以下《ТШ》と略記] Ч. II, №. 413.

3) 《ТШ》 Ч. I, №№. 382, 427; 《Победа Великой Октябрьской социалистической революции

社会団体代表を加えてソヴェト権力が樹立されている<sup>4)</sup>。地域におけるソヴェト権力樹立のイニシアチブは地域の社会構成の多様性に依拠して一元化できないが、樹立されたソヴェト権力は労兵農ソヴェトとして、地域の革命的民衆に依拠する複合的、統合的な地域権力であった<sup>5)</sup>。二月革命以来、各地に簇生し相互に分立していた各ソヴェトが、労兵農ソヴェトとして統合する過程もこの時期に完了する<sup>6)</sup>。

この地方ソヴェト権力の樹立をボリシェヴィキのみの「指導」に帰すことは決してできない。ボリシェヴィキをはじめ、新しい革命派として登場した左翼エス・エル、社会民主主義者の国際派や統一派、マキシマリスト、アナキストや革命的無党派が軍事革命委員会や地方ソヴェトでの共闘を通じて、地方ソヴェト権力の樹立をもたらしたのである。地方ソヴェト権力の樹立を先導した地方の軍事革命委員会でのボリシェヴィキの大きな党派比率は確認されるが（表I参照）、それを絶対的な「指導」にまで高揚するのは正しくない。最近の研究によると、中央部ロシア、ヴォルガ＝ウラル地帯の24県に組織された28の県軍事革命委員会のうち、党派構成の判明する27組織について、純粋にボリシェヴィキのみから構成されたのは、僅か6組織で、ボリシェヴィキと他党派、無党派から成るのが18組織、ボリシェヴィキ以外の党派の主導下につくられたのが3組織であった<sup>7)</sup>。軍事革命委員会が最初は専らボリシェヴィキの党組織下に彼らから構成されたとしても、革命状況の進展につれ、他党派や無党派を含むものとして拡大せざるを得なかったし<sup>8)</sup>、一連の県郡の軍事革命委員会で左翼エス・エルなどの他党派や無党派活動家が積極的役割を發揮することができ、そのことは特に中央農業地帯やヴォルガ地帯で顕著であった。これら

в Самарской губернии», документы и материалы, Куйбышев, 1957 [以下《Самара》と略記] №. 132; 《Октябрьская революция и установления советской власти в Чувашии», сб. документов, Чебоксары, 1957, [以下《Чувашия》と略記] №. 105; 《Борьба за советскую власть в Самарской губернии», Куйбышев, 1957, с. 100-101; 《Революционное движение в русской армии в 1917 году», М., 1981, с. 196.

- 4) オリョール県では、いくつかの郡で農民ソヴェトや農民大会が軍事革命委員会を組織しソヴェト権力の樹立に導いている。См., 《Борьба трудящихся Орловской губернии за установление советской власти в 1917-1918 гг.», сб. документов, 1957 [以下《Орёл》と略記], №. 172, с. 307. カザン県では、ツイヴィリスク郡の権力の担い手として、農民ソヴェトがゼムストヴォ会議から6名、地方守備隊から3名、市会代表1名で構成されたが、労働者代表はその社会層の薄さを理由に代表権が与えられていない。またヤドリノ郡の兵労農ソヴェト執行委員会は、市と郡部の全権力を引き取ったが、それは農民代表8名、労働者、兵士、市からの代表各1名で構成されていた。《Чувашия》, №№. 113-4, 116, прим. 65.
- 5) しかし、非ロシア系異民族にとって、地方ソヴェト権力の樹立は疎外された政治過程でもあった。ツイヴリスク郡住民は主に洗礼を受けたチュバシから成っていたが、当郡農民ソヴェトでは1918年1月にカザン労働者の支援の下でソヴェトからエス・エルと民族主義者が追放され、郡ソヴェトの農民的民族的性格が失われている。《Чувашия》, с. 24; В. П. Семенов, ред., Россия, Т. VI, С. Петербург, 1901, с. 339.
- 6) Х. А. Ерицян, Слияние советов крестьянских депутатов с советами рабочих и солдатских депутатов в период триумфального шествия советской власти, 《История СССР》, 1957, №. 3, с. 30.
- 7) Р. Г. Цыпкина, Военно-революционные комитеты в Октябрьской революции, М., 1980, с. 73-4.
- 8) そのような例として、ヴォローネン, ニジェゴロド, トウーラ, オリョール市などの軍事革命委員会を指摘できる。逆に他党派を排除し、ボリシェヴィキのみで軍事革命委員会を再編した事例はみられない。Там же, с. 20-29.

表 I 県軍事革命委員会の党派構成\*

党 派 性	人 数	%
ボ リ シ ヲ ヴ ィ キ	112	65.5
左 翼 エ ス ・ エ ル	34	19.8
メ ン シ ヲ ヴ ィ キ 国 際 派	} 13	7.6
ア ナ ー キ ス ト		
ポーランド社会主義者		
メ ン シ ヲ ヴ ィ キ	} 6	3.5
右 派 エ ス ・ エ ル		
無 党 派	3	1.8
党 籍 不 明	3	1.8
計	171	100.0

\* ヴラジミール、コストロマ、ニジネゴロド、トヴェーリ、ヤロスラヴリ、トゥーラの中央工業地帯6県、ヴォローネシ、カルーガ、クルスク、オリョール、リャザン、スモレンスク、タムボフの7つの農業県、ヴィヤトカ、オレンブルク、ペルミ、ウファのウラル地方の4県、アストラハン、カザン、ペンザ、サマラ、サラトフ、シムビルスクのヴォルカ地帯6県、計23県の県軍事革命委員会が分析の対象となっている。

典拠 Р. Г. Цыпкина, Военно-революционные комитеты в Октябрьской революции (по материалам губерний центрального промышленного района, Урала и Поволжья) М., 1980. с. 77-81.

農業諸県では、中央工業地帯に比して、軍事革命委員会でのボリシエヴィキ以外の活動家の占める割合が高いことによってもそのことは確認される<sup>9)</sup>。クルスク県では、11月26日に県労兵農統一ソヴェトが県革命ソヴェトを設置し、権力を掌握すると決定したが、県革命ソヴェト幹事会は6人の左翼エス・エルと2人のボリシエヴィキから成り、その議長は左翼エス・エルの E. H. ザビーツキであった<sup>10)</sup>。タムボフ県ではモスクワから派遣された左翼エス・エルの C. A. エヴフォリツキーが、ソヴェト権力の樹立に大きなイニシアチヴを発揮し<sup>11)</sup>、ヴォローネシでは、緊迫した状況の下で10月27日につくられた「十人委員会」にボリシエヴィキ5人と共にエス・エル左派5人が加り、互いに連絡をとりつつ行動していた<sup>12)</sup>。カザン県ヤドリノ郡の軍事革命委員会を組織したのは無党派で左翼エス・エルの同調者 И. Г. カドイコフであった<sup>13)</sup>。

9) Там же, с. 81-82.

10) 《Борьба за установление и упрочение советской власти в Курской губернии》, сб. документов и материалов, Курск, 1957 [以下《Курск》と略記] №№ 191-3, 196, прим. 73.

11) 《Установление советской власти в Мордовии》, документы и материалы, Саранск, 1957 [以下《Мордовия》と略記] No. 291. エヴフォリツキーは1918年3月初めの県第一回ソヴェト大会で県人民委員会議の長となっている。《Борьба рабочих и крестьян под руководством большевистской партии за установление и упрочение советской власти в Тамбовской губернии (1917-1918 годы)》, сб. документов, Тамбов, 1957 [以下《Тамбов》と略記] № 76; П. Крошицкий и С. Соколов, сост., Хроника революционных событий Тамбовской губернии, Тамбов, 1927, с. 53; В. Андреев и С. Кураев, Октябрьская революция и гражданская война в Тамбовской губернии, Тамбов, 1927, с. 36.

12) И. П. Тарадин, под общей ред., Октябрьская революция и гражданская война в Воронежской губернии, Воронеж, 1927, с. 49-51, с. 55.

13) カドイコフは後にカザン県チェヴォクサルイ郡労兵農ソヴェト議長にも選出されている。《Чува-

軍事革命委員会のみならず、この時期の県郡ソヴェトの党派構成もボリシェヴィキと共に他の革命諸党派や無党派が積極的に地方ソヴェト権力の樹立と運営に携っていたことを示している。県レベルでは、クルスク県で1918年2月24日から7月9日まで、タムボフ県では3月16日から4月2日まで、左翼エス・エルが県ソヴェト執行委員会議長を務め、サマラ県では、3月16日から5月17日まで、マキシマリストが県ソヴェトで多数を制し、ソヴェト執行委員会議長にはマキシマリストの А. Я. Дрогочейченкоが選出されている<sup>14)</sup>。カザン県では、ソヴェト議長のボリシェヴィキ、Я. С. Шейнкман, 副議長の左翼エス・エル、В. И. Моховと国際派の В. Н. Скачюковを中心にしたソヴェト権力が構成されたが、1918年7月まで県ソヴェトで左翼エス・エルは多数を占め、その影響力は圧倒的であった<sup>15)</sup>。郡レベルでは、1918年3月の時点で郡ソヴェトの党派構成は多様であり、全体としてボリシェヴィキが第一党の地位を占めているが、一連の郡ソヴェトで左翼エス・エルが相対・絶対多数を確保し、郡ソヴェトを主導する状況も生れていた<sup>16)</sup>。このように、1918年春の地方ソヴェトでボリシェヴィキの占める位置は大きかったが、それは排他的な政治的独占と指導を意味するものではなく、他の革命諸党派の主導する地方ソヴェト権力が出現する状況にあったのである。

臨時政府を支持し、ソヴェト権力樹立に反対する諸党派が市会やゼムストヴォを中心に各地に「祖国・革命・救済委員会」などの名称で反革命派の結集をはかったのに対し、県郡のソヴェト権力は革命諸党派と無党派を広く結集したものであり、そのことは地方ソヴェトでの革命諸党派の無党派を含む「共闘」*совместная борьба, сотрудничество* という政治的表現をとった。この「共闘」は、県郡ソヴェトの担い手に「同質社会主義政府」「同質民主主義権力」を強く要請する志向となって現れていた。リャザン県では、11月11日にリャザン労働者ソヴェトが全権力をソヴェトへ移すことを決定するとともに、同質社会主義政府の形成を求め、12月3-5日の第一回県労兵農ソヴェト大会は県下の全権力をソヴェト会議へ移すことを確認し、このソヴェト会議は5名のボリシェヴィキと4人の左翼エス・エルから構成された<sup>17)</sup>。リャザン県では現地でボリシェヴィキと左翼エス・エルの共闘を実現しつつ、同質社会主義政府の要求を提起していたのである。トゥーラ県では、10月30日のトゥーラ労兵ソヴェト総会で、ソヴェト執行委員会へはボリシェヴィキ

сия), № 156, прим. 78.

- 14) クルスク県については、см., 《Курск》, с. xiii, xvi-xviii. №№ 259, 303, 359, прим. 120., タムボフ県については、《Тамбов》, №№ 76, 91; Хроника революционных событий..., с. 53; С. А. Пионтковский, ред., 《Советы в Октябре》, сб. документов, М., 1928, с. 359-61. サマラ県については、《Самара》, №№ 234, 301-2, прим. 148, прим. 177; Борьба за советскую власть в Самарской губернии, с. 136-7.
- 15) 《Чувашия》, прим. 83-4; 《Упрочение советской власти в Татарии (октябрь 1917-июль 1918 гг.)》, сб. документов и материалов, Казань, 1964 [以下《Татария》と略記], с. 17-8, №№ 187, 622.
- 16) К. В. Гусев, Х. А. Ерицян, От соглашательства к контрреволюции, М., 1968, с. 433-5. 中央農業地帯と沿ヴォルガ地帯の資料の判明する10県91郡中、13郡のソヴェトで左翼エス・エルが第一党の地位にあったことが確認できる。Х. А. Ерицян, Слияние советов..., с. 36-7.
- 17) 《Борьба за установление и упрочение советской власти в Рязанской губернии (1917-1920 гг.)》, сб. документов, Рязань, 1957 [以下《Рязань》と略記] №№ 102, 104-6, 115-6; А. С. Смирнов, Крестьянские съезды в 1917 году, М., 1979, с. 207.

の多数派を選出し、議長も同派の A. И. カウーリであったが、メンシェヴィキ国際派の提出した「同質社会主義政府」の要求を受け入れざるを得なかった<sup>18)</sup>。サラトフ県では、11月30日から12月4日までサラトフ労兵ソヴェトによって郷農民代表者大会が開かれ、ソヴェト権力が承認され、大会選出の執行委員会は労兵ソヴェト執行委員会と合同した。大会は中央のソヴェト権力を承認しつつ、「実質的な人民権力」「労兵農ソヴェトから成る同質民主主義権力」の形成を求め、大会議長の M. И. ヴァシーリエフは大会翌日、首都の人民委員会議とソヴェト中央執行委員会へ次のように打電した。

「ペトログラードで形成された権力を承認し、我々は都市及び農村の勤労民主派が団結し、ペトログラードで形成された権力とその諸布告を承認する全政党と農労兵ソヴェトから成る同質民主主義権力を構成することを呼びかける。」<sup>19)</sup>

サラトフ郡ではさらに、農労兵ソヴェトとソヴェト権力を支持する全ての政党から、「同質民主主義党」を構成するとさえ決定されている<sup>20)</sup>。カザン県では、12月7-17日の第三回県農民大会が、郡農民ソヴェトが郡ソヴェト権力を担うと決定するとともに、現情勢に関する決議のなかで、「農民と労働者の自由意志を<sup>ヴォーリヤ</sup>実行すべき同質の革命的社會主義権力の創設のための革命的統一戦線」を提唱し、分裂した民主派を統一する「第一の社会主義政党」として、左翼エス・エルを指名していた<sup>21)</sup>。

このような地方ソヴェトでの革命諸党派の「共闘」と連合権力志向は、スターリン時代には「カーメネフ・ジノヴィエフ路線」として断罪され<sup>22)</sup>、現在では地方ボリシェヴィキの戦術的未熟さや一時的妥協として処理されているが、中央でのボリシェヴィキと左翼エス・エルの人民委員会議を場とする連立政権の成立<sup>23)</sup>を促迫するとともに、中央レヴェルよりはるかに広く革命諸党派や無党派を結集し、より持続的に中央と並行的に存続した。地方ソヴェト権力のこの広範な「共闘」性向と、地域の革命的民衆の複合的、統合的権力としての性格から、この時期の地方ソヴェト権力は自らを「プロレタリア独裁」の権力機関と明示的、一元的には位置づけず、多様な権力規定を行っていた。トゥーラ県では労兵

18) 《Октябрь в Туле》，сб. документов и материалов, Тула, 1957, с. 46-9, № 150.

19) ヴァシーリエフはサラトフ労兵ソヴェト執行委員会副議長でボリシェヴィキであった。《1917 год в Саратовской губернии》，сб. документов, Саратов, 1957, [以下《Саратов》と略記] № 195; 《ТШ》，Ч. I. № 409. прим. 145.

20) 《ТШ》，Ч. II, № 445.

21) 《Революционная борьба крестьян Казанской губернии накануне Октября.》，сб. документов и материалов, Казань, 1958 [以下《Казань》と略記] №№ 392-3; 《Чувашия》，№120.

22) スターリン時代には、「単一の党」の指導と「中央から地方、辺境への革命の波及」が強調された。この党指導＝波及論は、地方や辺境での共闘的権力形態を「カーメネフ・ジノヴィエフ陣営の裏切り行為」と断罪し、ソヴェト権力の早期の強固な確立を阻げたと評価していた。См., Э. Генкина, Победа Великой Октябрьской социалистической революции на местах. 《Исторический журнал》，1942, № 10, с. 52-6.

23) 中央でのボリシェヴィキと左翼エス・エルの連立政権は、12月10日の人民委員会議と左翼エス・エル党中央委員会の協定で、後者から7名を入閣させることで結実し、1918年3月16日の第四回全露ソヴェト大会最終日での、左翼エス・エル、И. З. Штейнбер格的人民委員会議からの自党代表召還声明まで存続した。Декреты советской власти. Т. I, М., 1957, № 139; Стенографический отчет 4-го Чрезвычайного Съезда Советов рабоч., солдатск., крестьянск. и казачьих депутатов, М., 1920, с. 67.

ソヴェト主導の下でソヴェト権力樹立の方向が定まり、12月31日から翌1918年1月1日まで開かれた第五回県農民大会でソヴェト権力が承認され、労兵ソヴェトとの合同が決定された。その大会決議は「革命的軍隊に支持された労働者と貧農の独裁」、あるいは「農民・労働者・兵士の独裁」とソヴェト権力規定を行い、郡レベルでは全権力は農民ソヴェトに属するとし、「農民・労働者革命」を唱道していた<sup>24)</sup>。

1917年秋から1918年春までの時期はまた、各地のソヴェトで革命諸党派が著しく増勢し、臨時政府は権力危機に瀕し、打倒され、地域で自立的なソヴェト権力が創出される過程であり、地方政治勢力の激動と再編の時期であった。この時期にソヴェト権力の担い手たる多くの活動家にとって党帰属性と党拘束性の流動的な状況が生れていた。ボリシェヴィキや左翼エス・エルなどの新たに組織を確立、拡大しつつ、ソヴェト権力の樹立を進めていく革命諸党派の周りには、その「同調者 *сочувствующие*」と「無党派 *беспартийные*」が存在し、このことが地方ソヴェトの政治的流動化と革命化を促す土壌を成していた。シムビルスク県カルスン郡で1917年11月以来、ソヴェト権力の樹立を進めてきた自称「左派」6名が、翌年2月に自らボリシェヴィキ・共産主義者の党と表明するに至る経過にも、地方における政治的流動性を窺い知れる<sup>25)</sup>。クルスク県やタムボフ県の第一回県ソヴェト大会でみられた、代議員党派構成で多数を占める党派の決議が、必ずしも大会で採択されない事態は、これらのソヴェト大会における無党派や同調者の存在とともに、大会代議員の党帰属性と拘束性への意識が希薄であったことを示している<sup>26)</sup>。この時期に地方ソヴェト活動家や代議員にみられた政治的流動性は、地方ソヴェトへの無党派や同調者の結集を促し、そこでの「共闘」の基盤を拡大助勢し、地方ソヴェト権力の樹立と確定にプラスの作用を果たしたといえる。

地域の革命諸党派や、無党派を最大限に結集しつつ、地域で樹立されたソヴェト権力は、県郡、市という行政レベルで重層的で相互に自立的な政治領域を創出していた。県

24) 《ТШ》，Ч. I, № 371; Ч. II, прим. 207.

25) Шестой Всероссийский чрезвычайный съезд Советов раб., кр., каз. и красноарм. депутат. Стенографический отчет, М., 1919. с. 114-5; 《Борьба за установление и упрочение советской власти в Симбирской губернии (март 1917 г.-июнь 1918 г.)》，сб. документов, Ульяновск, 1957 [以下《Симбирск》と略記] №№ 110, 247.

26) タムボフ県第一回ソヴェト大会の代議員党派構成は、参加代議員500名中、ボリシェヴィキとその同調者261名、左翼エス・エルとその同調者166名、右派エス・エル25名、無党派32名であった。大会ではボリシェヴィキ提出のソヴェト権力支持決議は採択されたが、組織問題では左翼エス・エルの提案が受け入れられ、左翼エス・エルのエヴフォリッキーを先頭とする40名から成る県人民委員会議と執行委員会が組織されている。Хроника революционных событий..., с. 53; А. С. Смирнов, Крестьянские съезды..., с. 205. クルスク県第一回ソヴェト大会では、489名の代議員の党派構成は、ボリシェヴィキ206名、同シンパ35名、エス・エル国際派164名、その他は党籍不明で、ボリシェヴィキが多数を占めたが、採択された決議は全て「純粋にエス・エルの」であった。これは党籍不明の代議員の大きな割合とともに、党綱領や規約を理解せずに“ボリシェヴィキ”と自称する農民代議員が存在したことに大きく影響されていた。また、大会選出の人民委員会議幹部会には、ボリシェヴィキ2名、左翼エス・エル5名の他に無党派の司祭ロマーキンが選出されたが、彼は「根拠なく」「コミュニスト」と名乗っていたし、ボリシェヴィキ二人の内、コーガンはかつてメンシェヴィキ国際派であった。Курск в революции, сб. материалов по истории Октябрьской революции в Курском крае. 1917-18 гг., Курск, 1927, с. 53; 《Курск》，с. xiii, № 259.

郡のソヴェト権力は中央と同じく、多人数の執行委員会、人民委員会議と人民委員部を組織し自立的に行動した。この自立性は屢々、「共和国」構想にまで発展したり、県郡レベルでの緊迫した軋轢を生む事態さえ引き起こした。カザン県では、1918年2月に旧カザン県地域が「カザン労農（ソヴェト）共和国」と宣言され、2月26日の県ソヴェト決議によって、14の委員部を擁する人民委員会議が「共和国」の執行機関として創設された<sup>27)</sup>。サラトフ県では、県ソヴェト執行委員会の多くの成員が「サラトフ・ソヴェト共和国」と県人民委員会議の創設を構想していた<sup>28)</sup>、タムボフ県ウスマン郡では、郡ソヴェトは県ソヴェトから強い自立性を示し、その自立性は郡ソヴェト議長 Н. Н. イスポラートフの名をとり「イスポラートフ体制 **исполатовщина**」として知られていた<sup>29)</sup>。地方ソヴェト権力のこの自治・自立性は、地域の革命的民衆の創意と、地域の最高の人民代表機関であるソヴェト大会に依拠することに根拠を有するものであり、後にソヴェト機構の位階的中央集権化が進むとともに、「地方主義」「分離主義」「並行主義」と否定的に扱れるとはいえ、この時期の地方ソヴェトを特徴づける著しい構造的特色であった。

このように、1918年春に地域の革命的民衆の複合的・統合的権力として、地方ソヴェト権力は樹立・成立し、相互に自治・自立的な政治領域を構成していた。そこでは、地方ソヴェト活動家の政治的流動性を土壌として、中央の人民委員会議にみられるポリシェヴィキと左翼エス・エルの連立より、はるかに広範かつ強力な「共闘」性向が、即自的に形成され存続していた。

## II. 地方ソヴェト権力の危機

1918年春から夏にかけて、地域民衆の自立的動向の下で、地方ソヴェト権力の担い手たる諸党派の間に政治的見解の分岐と対立が鮮明となり、地方ソヴェトでの即自的な「共闘」は崩壊の兆しを示し、地方ソヴェト権力に政治的危機が醸成されることになる。

地域の革命的民衆の複合的権力として、労兵農ソヴェトの形態をとって樹立されたソヴェト権力は、1918年春から権力基盤の変動と地域民衆の自立化動向に直面した。1918年春には、各地に駐屯する守備隊兵士は動員解除され、地方ソヴェトの兵士部会は続々と廃止されていく<sup>1)</sup>。労働者層の薄い地方都市で、地方ソヴェト権力の直接的な武装力を成し革命的民衆として、守備隊兵士のもつ意義は大きかったが、その動員解除により、地方ソヴェト権力はその社会的基盤の一つを失い、活動を停滞、弱化させることもなった<sup>2)</sup>。多くの復員兵士は農村に戻り、郷村共同体の政治を活性化しつつそこに同化吸収されていっ

27) 《Чувашия》, прим. 83-84; 《Татария》, № 187.

28) 《Саратов》, прим. 120.

29) 《Тамбов》, с. 19.

1) シムビルスク県では2月16日に県ソヴェト兵士部会が廃止され《Симбирск》, № 250; 《Власть Советов》, 1919, № 11, с. 21 サラトフのソヴェト兵士部会は3月初めに廃止されている。《Саратов》 прим. 122. トゥーラ労兵ソヴェトは4月10日に労働者ソヴェトと改称し、トゥーラ市での軍隊動員解除を4月25日に完了している。《Упрочение советской власти в Тульской губернии》, сб. документов и материалов, Тула, 1961 [以下《Тула》と略記], с. 410-411, 415.

2) オリョール市ソヴェトは、兵士部会が廃止されて以降、1918年5月半ばの市ソヴェト選挙まで殆んど召集されなかった。《Власть Советов》, 1919, № 11, с. 19.

たが、都市に滞留した復員兵士は、経済崩壊のなかで互助と就職のため出征軍人会 **СОЮЗ ФРОНТВИКОВ** を各地につくり、地方ソヴェト権力にとって自立的で、危険な徴候さえ示すようになった<sup>3)</sup>。

都市や工場集落の労働者も経済的崩壊の下で、社会層を薄めるとともに、飢餓と失業の脅威に晒され、自立的動向を示した。圧倒的に農業的性格をもつ中央農業地帯と沿ヴォルガ地帯では、農村で展開した農民革命・土地割替に一部の労働者は吸収され、労働者は全体として農村との結びつきを強めた<sup>4)</sup>。これらの地域で工業拠点を成すニジェゴロド市とその近隣の工場集落、トゥーラ市、オリョール県ブリャンスク地区では、労働者による暴動やストライキが発生した。ニジェゴロド県の工場地帯は、5月半ばから緊迫し、ニジェゴロド、ソルモヴォ、カナヴィノなどでは6月18日に小店主、職員、雑業者層を含むゼネストに発展している<sup>5)</sup>。トゥーラ市では兵器廠、実包工場、鉄道修理場で、6月18日から28日までストライキが続き<sup>6)</sup>、オリョール県のブリャンスク＝ベヂツク地区では「政治情勢は食糧問題と関連してポグロム的である」と指摘されていた<sup>7)</sup>。都市や工場集落での一連の暴動やストライキにみられる労働者の自立的動向は、市ソヴェトを中心に無党派の増勢と、それに助けられたメンシェヴィキとエス・エルの進出を生み、地方ソヴェト権力に脅威を支えるものであった<sup>8)</sup>。

県郡レベルの農民大会と農民ソヴェトを通じて、地方ソヴェト権力に統合された農民も、1918年春より共同体にあって土地割替をスチヘーヤ的に実現しつつ、共同体への帰属意識を強め、郷村共同体に樹立されたソヴェト権力をたえず農民の政治風土に同化する傾向を示し、共同体の外からもたらされる県郡ソヴェトの諸政策、とりわけ食糧調達に強く抵抗した。郷村レベルでの農民のこのような自立化は、ソヴェトの「クラーク」化と現象したり、ソヴェトや食糧部隊、貧農委員会への抵抗、攻撃と追放などの、一連の「クラー

3) М. С. Бернштам, ред., Урал и Прикамье..., с. 358; Г. Ходаков, Очерки истории Саратовской организации КПСС, Саратов, 1957, с. 347-8; 《Переписка секретариата ЦК РКП (б) с местными партийными организациями», сб. документов, М., 1969 [以下《Переписка》と略記], Т. IV, № 145.

4) Труды ЦСУ, Т. XXVI. вып. 2, 《Профессиональная перепись», М., 1926, с. 118-9; В. З. Дробижев, А. С. Соколов, В. А. Устинов, Рабочий класс советской России в первый год пролетарской диктатуры, М., 1975, с. 150-206.

5) 《Поведа Октябрьской социалистической революции в Нижегородской губернии», сб. документов, Горький, 1957 [以下《Нижегород》と略記], №№ 485-6, 503, прим. 122; 《Независимое рабочее движение...》. №№ 34, 70-74.

6) 《Известия ВЦИК», № 121 (385), № 122 (386); Д. А. Чугаев, ред., 《Рабочий класс советской России в первый год диктатуры пролетариата», сб. документов и материалов, М., 1964, прим. 15.

7) 《Орёл», № 258.

8) Солмоโว, Богорлотскなどのニジェゴロド県の工場集落、ブリャンスク、ベヂツク、マリツエヴィエのオリョール県の工場集落、トゥーラ、タムポフ、オリョール市でそのような状況が現出している。《Независимое рабочее...》, № 75, с. 236-7; № 97, с. 316-7; 《Новая жизнь》. № 87, 1918, с. 4 [J. Bunyan, *Intervention, Civil War and Communism in Russia. April-December 1918. Documents and Materials*, Baltimore, 1936, p. 559]; 《Власть Советов》, 1919, № 11, с. 19, 27-28; 《Орёл》, прим. 92.

ク」蜂起を瀕発せしめた<sup>9)</sup>。

このような地域民衆の変動と自立化のなかで、地方ソヴェトに即自的に形成された「共闘」はどのように展開したであろうか。メンシェヴィキやエス・エルなどの政治行動に対して、地方ソヴェトの革命諸党派の「共闘」は継続していた。タムボフ県では、4月初めのタムボフ市ソヴェト改選でのメンシェヴィキとエス・エルの進出に際して、県ソヴェト執行委員会で共産主義者と左翼エス・エルがソヴェト権力を擁護すると確認され、必要とあらば「左派諸党派の独裁」を樹立すると決定しており、6月の第二回県労組大会では、ポリシェヴィキと左翼エス・エルは「左派ブロック」を組んで共同決議を提出していた<sup>10)</sup>。5月半ばのオリョール市ソヴェト選挙では、無党派の進出と支持を得て、メンシェヴィキとエス・エルが多数派を形成したのに対して、ポリシェヴィキと左翼エス・エルをはじめ左派社会主義諸党派は共闘を組んでいる<sup>11)</sup>。地方ソヴェト権力の担い手たる革命諸党派のこのような「共闘」は、しかし、意識的かつ持続的に追求されたものではなく、「共闘」を担う諸党派の間で、1918年春以来、ブレスト講和、地域住民への課税と財政問題、ソヴェト統治機構の組織編成をめぐって意見の分岐が生じ、とりわけ、農民からの食糧調達に関しては、ポリシェヴィキと左翼エス・エル、マキシマリストなどの間で鋭い対立が生れた。タムボフ市及び県ソヴェト執行委員会では、4月25日にポリシェヴィキが有産諸階級への課税を提起したのに対し、左翼エス・エルは、県ソヴェトメンバーの解散に関する県ソヴェト執行委員会決定の再検討を「最後通牒的」に求め<sup>12)</sup>、課税問題と執行委員会への権力集中をめぐって、「共闘」を担う両党の対立が表面化していた。サマラ県では、マキシマリストと左翼エス・エルが県執行委員会で多数を占め、県執行委の労働者部会とサラマ市執行委員会はポリシェヴィキが制しており、両派は春以来、ブレスト講和、食糧調達、ソヴェト統治形態、赤軍部隊の指揮権をめぐり対立を深め、県ソヴェトの行政部が組織できない状況が生れていた<sup>13)</sup>。

地方ソヴェトでの革命諸党派のこのような「共闘」は、そこでの意見の分岐と対立を調整できずに、地域民衆のソヴェト権力からの自立化のなかで、「共闘」の担い手たる諸党派に危機意識が醸成され、危機からの脱出が模索されることになる。ニジェゴロド県では、「共闘」が地域民衆の自立化のなかで危胎に瀕し、地方ソヴェトの権力危機が顕在化してくる状況が鮮明に示されている。

1918年6月15日、ニジェゴロド県労兵農ソヴェト総会は県ソヴェト大会の召集を論議している。ここで、地域民衆の自立化と関連して、地方ソヴェト権力の社会的基盤をめぐり意見の鋭い対立が生じた。県ソヴェトの指導者でポリシェヴィキの И. Р. ロマーノフは、「農民はロシア革命が提起する政治的諸課題をしばしば理解せず、中央の諸決定を実

9) 拙稿「ロシア革命と農民—共同体における『スチヒーヤ』の問題によせて—」『スラヴ研究』第29号、1982年、20-23頁。

10) 《Советы в Октябре》，с. 359-361；Хроника революционных событий...，с. 56, 59.

11) 《Власть Советов》，1919, № 11, с. 19.

12) Хроника революционных событий...，с. 57.

13) Г. Лелевич, Анархо-максималистская революция в Самаре в мае 1918 г., 《Пролетарская революция》，1922, № 7, с. 142-3；《Самара》，№ 298, прим. 177, прим. 179.

施せず、食糧事情の崩壊に投機するクラークに教唆され、諸決定とは正反対の方向に進んでいる」と、農民への不信を述べ、県ソヴェト大会は郷村の直接代表ではなく、郡レヴェルの代表と工場労働者代表を優先する小大会とすることを提案した<sup>14)</sup>。これに対して、左翼エス・エルのシュエロフは次のように反論した。

「同志共産主義者は、農民はうまく組織されておらず、クラークが容易に彼らを騙している、と言明している。我々は、農民ソヴェトはさほど恐るべきものでなく、懸念するものは何もないと考えている。なるほど農民は組織化されていないが、しかし反革命家らと一諸に歩んではいけない。まさに労働者地区で反革命行動が起きているということが我々にはよい実例を示している。ソルモヴォ、クレヴァキ、ボゴロトスコエをみたまえ。これらの地区では、ソヴェト権力に反対して決議と行動が向けられている。農民の間ではこのようなことはなく、到る所でソヴェトへの支持と是認が聞かれる。」

彼はこのように労働者地区への不信を示し、郷代表を含む広範な代表に依拠する権威あるソヴェト大会の召集を求めた<sup>15)</sup>。マキシマリストのフレキンは左翼エス・エルの提案を支持し、ソヴェト権力が広範な住民層に依拠せねばならず、農民の組織化が必要とし、「農民を危惧するのは無用だ、今、我々は大会召集を恐れている、ところで時がたつと恐らく、執行委員会の召集を懼れるようになるだろう」と警告した<sup>16)</sup>。国際派で県コミッサールのВ. И. シビリャコフは、ソヴェトが広範な大衆に依拠すべきことには反論がないとしつつ、「しかし、大衆はまだ十分に準備されておらず、屢々、中央権力が出した諸法令に反して行動している」とし、大衆のなかでソヴェト権力が威信を失っている状況を指摘した。彼は農民に期待をかける左翼エス・エル、マキシマリストに強く反論し、ポリシェヴィキの提案を支持し、次の様に発言した。

「さて、ここで同志諸君は農民は革命的であると話している、ところが私の許には農民が郷ソヴェトを解散し、郷長と村長を選出したことを語る多くの資料がある。諸君が郷からこれらの代表を集めてみたまえ、だが、彼らはその時、郷ソヴェトと同じく諸君を葬り去るだろう。」<sup>17)</sup>

この日の県ソヴェト総会は、メンシェヴィキ、右派エス・エル、ブントらがソルモヴォ事件に抗議したのに対し、ポリシェヴィキ、左翼エス・エル、マキシマリストは一致して対抗し、「共闘」を維持したが<sup>18)</sup>、同時に、地域労働者や郷村共同体農民の自立化のなかで、ソヴェト権力の社会的基盤をめぐって、「共闘」を担う諸党派の間で対立が鮮明となったのである。結局、賛成 67、反対 46、棄権 4 で、郡レヴェルと労働者地区、ニジェゴロド

14) 《Нижегород》, № 503.

15) Там же.

16) Там же.

17) Там же.

18) ソルモヴォでは、6月9日に労働者の状態を検討するため労働者協議会が予定されていたが、労働者への発砲事件に至り、協議会は召集されなかった。右派エス・エル、メンシェヴィキ、ブントはソルモヴォのこの労働者弾圧事件を議題とすることを提案したが、3対多数で否決され、「チェコスロバキア人のところへ行け」「ドンへ」「ドゥートフへ」との罵声のなかで、彼らは総会を退場している。Там же, № 503, прим. 122.

市ソヴェトから県ソヴェト大会へ代表を選出すると決定した<sup>19)</sup>。

県ソヴェト大会は6月23日から26日まで開かれ、大会代議員の報告、発言に自立化を示す地域民衆への強い不信感が漂う状況の下で<sup>20)</sup>、「プロレタリアと勤労農民の独裁」を基礎にソヴェト権力を通じて社会主義を展望するという点では、ソヴェト権力を担う諸党派に一致が確保されたが、「プロレタリア独裁」と貧農組織化を通じて社会主義を展望するという点では鋭い対立が現れた<sup>21)</sup>。ついに、左翼エス・エルは大会で県ソヴェト執行委員会への参加を拒否するに至った。<sup>22)</sup>

左翼エス・エルのソヴェト機関からの自派召還は、ソヴェトにおける「共闘」が、さらにそれに依拠する地方ソヴェト権力が決定的危機に瀕したことを象徴的に示すものであった。ニジェゴロド県に限らず、6月末に一連の県郡ソヴェト執行委員会から左翼エス・エルは自派を召還し始めた。ヴォローネシ県では、6月17日に食糧、財政をめぐる対立から、左翼エス・エルは県ソヴェト執行委員会から自派を召還している<sup>23)</sup>。トゥーラ県では、6月17日に県ソヴェト執行委から、24日には同県カルピヴニイ郡ソヴェト執行委から、左翼エス・エルは自派を召還している<sup>24)</sup>。

この6月末の県郡ソヴェトでの「共闘」崩壊の兆しは、1918年春から夏にかけての地方ソヴェトでの諸党派の政治勢力の変動を考慮すると、地方ソヴェト権力の危機を一層、際立たせるものであった。1918年春—夏に県ソヴェトで左翼エス・エルはポリシェヴィキと拮抗する勢力を保持しており<sup>25)</sup>、表 II からも県ソヴェト執行委員会で、ポリシェヴ

19) 左翼エス・エルのシュエーロフは、この県ソヴェト大会が「臨時で」あり、「より恵まれた条件の下で早急に新しい拡大された大会が召集されねばならない」という付帯決議を提出し、全ての党派がこれに賛成した。Там же, № 503.

20) マカリエフ郡ソヴェト代表は「農民の大半はクラーク的であり、残りの農民は俗物である」とし、「俗物大衆は……ソヴェトへの期待を失いつつある」と述べ、工場地帯ソルモヴォの代表は、「雰囲気は俗物的である、何故ならそこに純粋なプロレタリアはおらず町人がいるからである」と発言していた。Там же, № 504.

21) 「プロレタリアと勤労農民の独裁」を謳った赤軍創設に関する決議は大会で満場一致で採択されたが、ポリシェヴィキ提案の「プロレタリア独裁」を求める地方権力の構成に関する決議は、反対22を含み、賛成60で採択されている。また、貧農の組織化について大会報告したポリシェヴィキは、「勤労農民とは曖昧な概念である」と左翼エス・エルの立場を厳しく批判していた。Там же, №№ 505-507.

22) Т. В. Осипова, Изменение партийного состава советов в 1918 г. (по материалам Московской области), сб. статей, 《Борьба за победу и укрепление советской власти 1917-1918 гг.》, М., 1966, с. 178.

23) 《Борьба за советскую власть в Воронежской губернии. 1917-1918 гг.》, сб. документов и материалов, Воронеж, 1957 [以下《Воронеж》と略記], № 120.

24) 《Тула》, № 80, с. 19.

25) カザン、ペンザ、シンビルスク県では、7月初めの第5回全露ソヴェト大会への県ソヴェト代表のなかで、左翼エス・エルが多数を占めるに至っており Пятый Всероссийский съезд советов раб., кр., солд. и казачьих депутатов, стенографический отчет. М., 1918, с. 236-48. オリョール県では、7月8～23日の第三回県ソヴェト大会で、共産党員56名、同シンパ91名に対し、無党派は47名、左翼エス・エルは134名を占める状況が生れている。《Орёл》, № 278, прим. 95. クルスク県では、5月半ばの第2回県ソヴェト大会でポリシェヴィキは多数を成し、県ソヴェト執行委員会で左翼エス・エル20名に対し、25名を占めたが、議長には左翼エス・エルのザビーツキが留任している。《Курск》, № 357. 他方、サマラ県では、5月17～19日のサマラ事件を契機に県ソヴェトで多数派を成し県ソヴェト執行委議長を務めるマキシマリストに代ってポリシェヴ

表 II 県ソヴェト執行委員会の党派構成 (1918年4-7月初め)

県名	執行委 総数	ボリシェ ヴィキ	左翼エス ・エル	その他党派	無党派	備 考
ヴォローネシ	29	26	1	0	1	1918年7月初めの党派構成。
クルスク	45	25	20	0	0	左翼エス・エル20人にはマキシマリストも含んでいる。5月10～22日の第2回県ソヴェト大会で選出。
オリョール	27	18	9	0	0	1918年4月16日の第2回県ソヴェト大会で選出。
リャザン	25	13	12	0	0	1918年5月22～26日の第3回県ソヴェト大会で選出されたと推定。 《Рязань》, прим. 57.
タムボフ	25	15(18)	10(7)	0	0	( )内は5月25日の第2回県ソヴェト大会で選出された数。
トゥーラ	90	53シンパ1	35	1ポーランド社会主義者	0	左翼エス・エルの数にはマキシマリストも含まれている。4月12-14日の第2回県ソヴェト大会で選出。
サラトフ	81	55	23	3マキシマリスト	0	1918年5月から9月までの県執行委員会の党派構成。
シムビルスク	50	30	14	6マキシマリスト	0	1918年5月12～20日の第6回県ソヴェト大会で選出。
ペンザ	18	12	6	0	0	この数は1918年4月上旬の県ソヴェト行政部 отдел の長の党派構成である。
サマラ	125					1918年3月13～16日の第6回県ソヴェト大会で選出され、執行委員の <sup>3</sup> / <sub>4</sub> は左翼エス・エルとマキシマリストから成る。
ニジェゴロド	25	25	0	0	0	1918年6月23～26日の県ソヴェト大会で選出。
カザン		26	44			1918年6月末の時点の党派構成。

典拠 クルスク県については《Курск》№№ 356-7, オリョール県については《Власть Советов》, 1919, № 11. с. 18, タムボフ県については3月1～4日の第1回県ソヴェト大会で、82名から成る県執行委員会が選出され、そこでは左翼エス・エルの С. А. エヴフォリッキーを先頭に、左翼エス・エルが多数を占めたが、4月初めに、ボリシェヴィキと左翼エス・エルの間で協定がなされ、ボリシェヴィキ15名、左翼エス・エル10名となり、議長はボリシェヴィキの М. Д. チチュカノフ、副議長は左翼エス・エルのエヴフォリッキーとなった。《Тамбов》с. 17-18, 《Советы в Октябре》, с. 359-361. 5月25日に開かれた第2回県ソヴェト大会では、ボリシェヴィキ18名、左翼エス・エル7名から成る県執行委員会が選出されている。А. С. Смирнов, Крестьянские съезды. с. 205. トゥーラ県については《Тула 1918》, прим 57; サラトフ県については《Саратов》, № 371, №328, прим. 121. シムビルスク県については、《Исторический архив》, 1956, № 7, с. 79 を参照した。1918年5月末の時点で50名の執行委員のうち、職務に実際に就いていたのはボリシェヴィキ25名、その同調者1名、左翼エス・エル11名、マキシマリスト3名の計40名であった。《Симбирск》№ 250. ペンザ県については、《Пенза》№№ 153-155. サマラ県については《Самара》, с. 16-17, Т. Д. Ионкина, Всероссийские съезды советов в первые годы пролетарской диктатуры. М., 1974, с. 146, カザン県については、Т. Д. Ионкина, указ. соч., с. 146. ヴォローネシ県については《Исторический архив》, 1956, № 5, с. 79 を参照。ニジェゴロド県では1918年6月末に県ソヴェト執行委員会へ左翼エス・エルは加わるのを拒否し、執行委員25名全員がボリシェヴィキから構成されるに致る。それ以前の県執行委の党派構成は未確定であるが、県ソヴェト総会のそれから、ボリシェヴィキ（社会民主主義者国際派を含む）対左翼エス・エル（マキシマリストを含む）の党派構成はほぼ3対2であったと推定できる。《Нижегород》, № 503.

表 III 労兵農統一郡ソヴェトの党派構成 (1918年3月14日の第四回全露ソヴェト大会開催時点)

地域	党派		ボリシェヴィキ	左翼エス・エル	他党派	無党派
	総	数				
中央農業地帯	3,922	(100)	2,579(65.8)	604(15.4)	264(6.7)	475(12.1)
ヴォルガ地帯	2,273	(100)	1,140(50.2)	554(24.4)	187(8.2)	392(17.2)
中央工業地帯	2,970	(100)	1,848(62.2)	533(18.0)	99(3.3)	490(16.5)
北部地帯	2,376	(100)	1,392(58.6)	442(18.6)	265(11.1)	277(11.7)
ウラル地帯	968	(100)	447(46.2)	167(17.3)	191(19.7)	163(16.8)
西部地帯	1,821	(100)	1,159(63.7)	274(15.0)	105(5.8)	283(15.5)

典拠 K. B. Гусев, X. A. Ерицяи, От соглашательства к контрреволюции, с. 433-5. 左翼エス・エルの同調者の数は, X. A. Ерицяи の論文からとり, 左翼エス・エルの項目に加算した。См. X. A. Ерицяи, Слияние советов..., 《История СССР》 1957, №3, с. 36-7.

備考: ( ) 内の数字は百分率を示している。

中央農業地帯では, ボリシェヴィキ, 左翼エス・エルの項目にそれぞれ, ボリシェヴィキ同調者 159 名と左翼エス・エル同調者が含まれている。沿ヴォルガ地帯のボリシェヴィキには, その同調者 216 名が含まれている。中央工業地帯では, ボリシェヴィキに, 同調者 113 名が含まれている。北部地域では原資料では, ペトログラード県の郡ソヴェト代議員総数が 422 人となっているが, 誤算なので, 449 人と訂正して計算した。同地域のボリシェヴィキの項目には同調者 40 名を含んでいる。

表 IV 郡ソヴェトの党派構成 (1918年3-6月期)

地域	党派		ボリシェヴィキ	左翼エス・エル	他党派	無党派	
	総	数					
中央農業地帯	郡ソヴェト大会	4,546	(100)	2,150(47.3)	1,052(23.1)	214(4.7)	1,109(24.4)
	郡ソヴェト執行委員会	755	(100)	475(62.9)	196(25.9)	16(2.1)	69(9.1)
ヴォルガ地帯	郡ソヴェト大会	1,384	(100)	646(46.7)	326(23.6)	27(2.0)	375(27.1)
	郡ソヴェト執行委員会	435	(100)	208(47.8)	131(30.1)	9(2.1)	85(19.5)
中央工業地帯	郡ソヴェト大会	2,317	(100)	1,006(43.4)	450(19.4)	88(3.8)	764(33.0)
	郡ソヴェト執行委員会	637	(100)	423(66.4)	142(22.3)	5(0.8)	66(10.4)
北部地帯	郡ソヴェト大会	1,779	(100)	786(44.2)	452(25.4)	143(8.0)	396(22.3)
	郡ソヴェト執行委員会	423	(100)	225(53.2)	175(41.4)	13(3.1)	52(12.3)
ウラル地帯	郡ソヴェト大会	139	(100)	51(36.7)	64(46.0)	1(0.7)	23(16.6)
	郡ソヴェト執行委員会	38	(100)	20(52.6)	12(31.6)	1(2.6)	5(13.2)
西部地帯	郡ソヴェト大会	905	(100)	486(53.7)	162(17.9)	15(1.7)	215(23.8)
	郡ソヴェト執行委員会	356	(100)	215(60.4)	97(27.2)	5(1.4)	28(7.9)

( ) 内の数字は百分率を示す。

典拠 K. B. Гусев, X. A. Ерицяи, От соглашательства к контрреволюции, М., 1968. стр. 438-447; K. Гусев, Крах партии левых эсеров, М., 1963, стр. 167-170. より作成。

イキが指導権をとり, 《Самара》, №№ 234, 301-2, прим. 148, прим. 177; 《Борьба за советскую власть в Самарской губернии》, Куйбышев, 1957, с. 136-7. タムボフ県では, 4月2日の協定で県執行委員会はボリシェヴィキ 15 名, 左翼エス・エル 10 名に改組され, ボリシェヴィキが多数派となった。《Тамбов》, № 91; 《Советы в Октябре》, с. 359-361.

ィキとともに地方ソヴェト権力を担う重要な地位を占めていることがわかる。郡レベルでは表 III と表 IV を対比することから 1918 年春—夏に、郡ソヴェト大会で左翼エス・エルと無党派が増勢し、それに対してポリシェヴィキが減勢し、過半数を割る状況が生れ、郡ソヴェト執行委員会では、左翼エス・エルと無党派が 3～5 割を占め、ポリシェヴィキは 5 割前後を擁しているが、その政治的地位は不安定化していた<sup>26)</sup>。ニジェゴロド県の各郡ソヴェト執行委員会の 1918 年 6 月 23 日現在の党派構成を示した表 V から窺えるように、ポリシェヴィキ、左翼エス・エル、無党派の「共闘」の崩壊が引き起こす政治権力の危機の深刻さが推測できる。かくして、1918 年春から夏にかけて、地方ソヴェトで「共闘」を担う第一党の地位が低下し、第一党との意見の分岐・対立を深めつつある第二党が増勢し、第三の勢力を成す無党派は地域民衆の自立化を受けて、地方ソヴェト権力への統合から不安定要因へ転化しはじめたのである。このような地方ソヴェトでの政治勢力の変動を背景にして、左翼エス・エルは食糧問題と工業崩壊からの革命救済を、プレスト講和破棄とドイツからのウクライナ解放戦争に見出し、一連の地方ソヴェトからも自派を召還し始めたのである。

地方ソヴェトで第一党の地位にあるポリシェヴィキは、1918 年春—夏のソヴェト権力の社会基盤の変動と地域民衆の自立化のなかで、党員を著しく失い、党組織の危機に瀕し<sup>27)</sup>、党規律の強化・遵守と党組織の整備拡大に努め、党フラクションの組織化とそれを通じて地方ソヴェトへ「統制」を実現する方向に、危機からの脱出を求めた。

1918 年前半をを通じて、全ての県と大部分の郡のソヴェト執行委員会でポリシェヴィキはフラクションの形成を完了している<sup>28)</sup>。ペンザ県ソヴェトのポリシェヴィキ・フラクション総会は、3 月 3 日に「自らポリシェヴィキと認める者」を党フラクション書記の下に登録し、彼らを党フラクションへ組織化することを通して、ソヴェト行政部 *отдел* とその長であるコミッサールへ「統制 *контроль*」を実現することを提起している<sup>29)</sup>。「統制」実現のこの提案は、自称ポリシェヴィキを党フラクションへ組織化し、党に固定化し、同

26) 郷村レベルの代表者から成る集会で、ポリシェヴィキの政治的地位は最も弱く不安定であった。トゥーラ県では 6 月半ばにエピファン、ヴェネフ、ボゴロヂツク郡で郷村ソヴェト代表者を集めた郡大会が開かれたが、ここではポリシェヴィキではなく左翼エス・エルが支持されている。《Тула》, №№ 60, 67, с. 413, прим. 75.

27) 1918 年 3 月にポリシェヴィキは党費を払っている党員 24 万人を含めて、中央委員会書記局に 30 万の党員が登録されていたが、1918 年半ばには約 15 万人に半減している。この減少は特に労働者地区で顕著であった。ニジェゴロド県のソルモヴォでは 1918 年 3 月の 1,200 人から、6 月 11 日には 425 人、9 月前半には 107 人と党員が減少し、カナヴィノでも、1918 年春から秋にかけて党員は減少し、5 月には党活動は「死点にある」と報告されていた。オリョール県のブリャンスク＝ベヂツイ地区、トゥーラ県でも党員の減少は著しかった。このような党の危機は 5 月 29 日付『ブラウダ』の党中央委員会の「呼びかけ」に明瞭に反映されていた。Л. М. Спирин, *Классы и партии в гражданской войне в России (1917–1920 гг.)*, М., 1968, с. 124–5, с. 428–30, приложение таблица 4; 《Переписка》, Т. III, 1967, №№102, 317, 252; 《Переписка》, Т. IV, 1969. № 124, прим. 1.

28) Е. Г. Гимпельсон, *Советы в годы иностранной интервенции и гражданской войны*, М., 1968, с. 38.

29) 《Подготовка и победа Великой Октябрьской социалистической революции в Пензенской губернии》, сб. документов и материалов, Пенза, 1957 [以下《Пенза》と略記], № 130.

表 V ニジエゴロド県の郡ソヴェト執行委員会の党派構成 (1918年6月23日現在)

郡名	総数	ボリシェヴィキ	左翼エス・エル	無党派	備考
パシリスルスク	15	4	5	6	
アルザマス	15	14	0	1	
ニジエゴロド	17	8	9	0	
ルコヤノフ <sup>1)</sup>	15	8*	7*	0	*同党のシンパを含んでいる。
ヴォスクレセンスコエ	12	3	7*	2	*同党のシンパを含んでいる。
アルダトフ	15	10	5	0	
パヴロヴォ <sup>2)</sup>	15	11	0	4*	*ボリシェヴィキのシンパとされている。
マカリエフ	15	6	?	?	多数は“右派 правый”から成っている。
セメノフ	25	?	?	?	ボリシェヴィキと左翼エス・エルで横成され意見の相異はない。
バラフナ	21	?	?	?	執行委員会成員の多くが食糧不足のため逃亡している。
セルガチュ	?	?	?	?	圧倒的にボリシェヴィキとその同諸者から成っている。
ゴルバトフ					} 不明。
クニヤギニン					
ポチンキ					

典拠 《Нижегород》, №504.

1) 1918年4月の時点での党派構成である。2) パヴロヴォ郡は革命後、新設された郡で22郷を含んでいる。См., И. А. Кириллов, Очерки землеустройства за три года революции. (1917-1920 гг.), Петроград, 1922, стр. 249.

時にみられた無党派への強い否定的認識と左翼エス・エルへの対抗意識と相俟って<sup>30)</sup>、ソヴェト権力の樹立過程を通じて現れた地方の政治的流動性に対処しようとするものであった。

5月20-24日にタムボフ県第一回共産党協議会が開かれ、一部の郡でボリシェヴィキがソヴェトの活動を既に強く統制している状況が報告されている。エラチマ郡代表は「ソヴェトへ多数派として我が組織の成員が入っており、そのうえ、ボリシェヴィキ・フラクションで審議是認される前に、一つの決定も執行委員会によって実施されない」と述べ、キルサノフ郡代表は「ボリシェヴィキの見解を反映しないような決定は執行委員会によって一つもなされない」と報告していた<sup>31)</sup>。党協議会は地方党組織のこのような動向を全県的な活動方針として確認し、次のような五項目から成る「タムボフ県の郡ソヴェト大会召集に関する決議」を採択している。

- 「1) ボリシェヴィキ・フラクションの事前審議なくして、一つの決定もなされない。
- 2) 大会議事日程はフラクションにおいて検討されねばならない。
- 3) 大会のボリシェヴィキ・フラクションには最も厳格な党規律が不可欠である、何らかの困難に際しては、ボリシェヴィキ・フラクションは党委員会に直接、援助と助言

30) 3月3日の総会はボリシェヴィキから2名を県ソヴェト執行委員会へ補充することで、多数派の左翼エス・エルに対抗しようとしたものであるし Там же, № 130, 4月8日の同党会議では通信コミッサールに無党派を指名するのは論外と厳しい批判がなされている。Там же, № 153, с. 247.

31) 《Тамбов》, № 108.

を求めなければならない。

4) 県執行委員会は25名で選出されねばならない。

5) 県執行委員会へは全てボリシェヴィキが入るように努める。」<sup>32)</sup>

同じく採択された「中央と地方におけるソヴェト活動に関する決議」では、「共産主義者＝ボリシェヴィキ党のみがソヴェト組織に課された全ての困難かつ責任ある国家的諸課題を実行することができる」と自負を示し、次の五つの課題が設定されていた。

「1) ソヴェトは排他的にボリシェヴィキから構成されること。

2) 党は3名から成るフラクシオン・ビューローを選出し、それにソヴェトと労働組合の活動を厳しく監視する任務が与えられる。

3) 党ビューローは執行委員会の各会議に先立ち、ソヴェト・フラクシオンと共に前以って議事日程を審議しなければならない。

4) ソヴェトの全指令が上から下へ、下から上へ機構階梯にそって通達されねばならない。

5) 人民委員会議とロシア共産党(ボ)中央委員会の全ての布告は、地方の諸条件に応じて、直ちに抗弁することなく実施されねばならない。」<sup>33)</sup>

これらの決議から、タムボフ県のボリシェヴィキがフラクシオンの組織・運営により、さらに排他的にソヴェト執行委員会のポストを独占することも含め、ソヴェトに統制を実現し、執行権の強化とソヴェト機構の位階制的整序化を目指していたことがわかる。

ペンザ県やタムボフ県のボリシェヴィキ党組織が志向した、フラクシオン活動の組織と強化を楨杆としたソヴェトへの統制実現の方向は、ソヴェト権力の樹立過程を通じて1918年春に形成された地方ソヴェトの政治構造そのものの転換を意味していた。地域の革命的民衆の複合的、統合的権力としてのソヴェト権力の階級的規定の多様性、ソヴェトにおける諸党派の「共闘」と政治的流動性、さらに地方ソヴェト権力の強い自治・自立性を特質とする地方ソヴェトの政治構造から、党フラクシオンの組織・運営を通じてソヴェトへの統制を実現する志向と一体となって、ソヴェト権力を「プロレタリア独裁」と規定し、その担い手として排他的に自党を位置づける志向が生れてきたのである。先のタムボフ県党協議会で採択された「組織問題に関する決議」では、「今、唯一必要とされている真のプロレタリア独裁」のため、党組織の強化発展が求められ<sup>34)</sup>、「中央と地方におけるソヴェト活動に関する決議」では、自党のみがソヴェトに課された「全ての困難かつ責任ある国家的諸課題」を実行することができるという自負していたのである。自党のみが「プロレタリア独裁」のソヴェト権力を担い得るというこの観念は、1918年春一夏の地域民衆の自立化のなかで、彼らへの強い不信を政治的土壌とし<sup>35)</sup>、他党派や無党派への否定的態度を生

32) Там же.

33) Там же.

34) Там же.

35) タムボフ県では、「タムボフのプロレタリアは政治的に未熟で、革命から立ち遅れ、人民の革命的指導者についていけない」と指摘されていたし《Советы в Октябре》, с. 360, 先の6月末のニジネゴロド県ソヴェト大会での代議員の、労働者と農民に関する発言も参照されたい。《Нижегород》, № 504. トウーラの共産党委員会は6月に、トウーラ労働者の自立化動向に直面し、そこに「プロ

み、さらにソヴェトでの「共闘」から排除する志向と結びついていた。6月22～25日のヴォロネシ県共産党協議会は現情勢に関する決議で、「プロレタリア独裁」の樹立が不可避であるとし、次のように述べている。

「この課題を実現するのは、我が党のみが可能である。同時に左翼エス・エルを通じて我が隊列に浸透している小ブルジョワのストヒーヤと断固として手を切ることが日程にのぼっている。小ブルジョワ的動揺に対する鉄のプロレタリア独裁、これが今日の一つの課題である。」

この決議は、さらに「疲弊、飢餓、失業がさほど堅固でない労働者大衆を協調的隊伍、さもなくば“無党派”に追いやっている」と述べ、労働者の自立的動向と関連して、他党派や無党派への否定的判断を示していたのである<sup>36)</sup>。

1918年春から夏にかけての地域民衆のソヴェト権力からの自立化のなかで、地方ソヴェトで第一の多数派を成すボリシェヴィキは党勢を減退させ、党の危機に遭遇し、地方ソヴェトの政治構造そのものを転換する方向へ進み始め、ボリシェヴィキとの「共闘」を維持していた左翼エス・エルは、ボリシェヴィキと拮抗しつつ増勢し<sup>37)</sup>、分岐・対立を深め、一部の地方ソヴェトで自派を召還し始めた。無党派は市労働者ソヴェトでは屢々、メンシェヴィキや右派エス・エルの反ソヴェト諸党派を助長しつつ自立化し、郷村レヴェルから輩出される無党派農民は県郡ソヴェトで増勢し、ボリシェヴィキに大きな脅威を与えることとなった。無党派は地方ソヴェトの統合要因から不安定要因へと転化したのである。かくして、地方ソヴェト権力の樹立過程を通じて、地方ソヴェトで無党派を含め革命諸党派の間に形成された「共闘」を基軸とする地方ソヴェトの政治構造は分裂の兆しをみせ、7月6日の左翼エス・エルのモスクワ事件の衝撃を契機に決定的に崩れ去り、地方ソヴェトは一党制政治システムに向けて急傾斜していくことになる。

### III. 「一党制」への傾斜

第五回全露ソヴェト大会の開催されている1918年7月6日、左翼エス・エルはドイツ大使を殺害し、ソヴェト権力の内政・外交にわたる政策転換を求める行動に出た。この行動は翌7日には鎮圧されたが、ソヴェト政治史における決定的転換点となった。9日に再開された全露ソヴェト大会は、左翼エス・エルのソヴェトからの追放を決議し<sup>1)</sup>、この七

レタリアの遅れた大衆の混乱と意気阻喪」を感知し、党が「単一の権威ある指導中心」たることを求めているのである。《Тула》, № 66.

36) 《Воронеж》, № 219.

37) 左翼エス・エル党は1918年4月の第2回党大会時に62,651人の党員を擁していたが、6月28日～7月1日の第3回党大会までに、ペンザ、オリョール、ヴォロネシ、トゥーラ県などでも勢力を伸張し、党員は約8万に至っていた。Т. Д. Ионкина, *Всероссийские съезды советов в первые годы пролетарской диктатуры*, М., 1974, с. 143-4; Л. М. Спирин, *Классы и партии...*, с. 164-5.

1) 《Пятый Всероссийский съезд Советов рабочих, крестьянских, солдатских и казачьих депутатов》, стенографический отчет. М., 1918. с. 208-9; J. Bunyan, *Intervention, Civil War and Communism in Russia April-December 1918*. Documents and Materials, Baltimore. 1936, pp. 197-214, 219-222.

月事件を契機として左翼エス・エル党は分裂し、地方ソヴェトから排除され、あるいは共産党に政治的に従属化し、その勢力を失い、1918年春以来の地方ソヴェトの政治構造そのものが崩壊していくこととなった。

地方ソヴェトからの左翼エス・エルの排除過程は、その形態とテンポにおいて各地の県郡ソヴェトで多様であったが、1918年7月以降、押し止め難く進行した。表 VI, VII は1918年から1921年までの県郡ソヴェト大会の代議員党派構成を示したものであるが、両表から、左翼エス・エルを中心とする他党派と無党派は県郡ソヴェト大会でそれぞれ2～3割を成す政治勢力から、1918年後半に著しく代議員数を減らし、かわって、共産党員と同シンパが大会代議員の7～9割を成し絶対多数を確保する勢力となったことが判明する。無党派は県郡ソヴェトで1919年以降、一定の回復を示し、これは特に郡ソヴェト大会で顕著であるが、嘗ての地方ソヴェトの政治的流動性を反映し、地域民衆の自立化動向のなかで輩出されてくる不安定要因としてのそれよりも、地方ソヴェト権力への統合要因としての性格をもつものであった。左翼エス・エルをはじめとする他党派は、1919年以降その衰減傾向が確定し、1920～1921年にかけて地方ソヴェトから最終的に姿を消すことになる。表 VIII から、県郡ソヴェトと市ソヴェトの執行委員会においても、ソヴェト大会の代議員党派構成を反映して、1919年には共産党員と同シンパが独占的地位を得ていることがわかる。従って、1918年後半から1919年初めにかけての時期は、地方ソヴェトの政治勢力の激動再編期であり、地方ソヴェトの政治構造が転換し、一党制政治システムが形成される過渡期をなした。

この過渡期において、1918年夏の地方ソヴェト権力の危機のなかで醸成された一党制政治システムへの志向が基本的政治動向となって現れた。この一党制への傾斜・転換は、他党派との共闘、さらに、統一戦線を頑に拒否する点に一つの特徴があった。クルスク県では、七月事件後、左翼エス・エルが県ソヴェト執行委員会から排除されており<sup>2)</sup>、10月28日から開かれた第三回県ソヴェト大会で、マキシマリストのシローコフは「統一革命戦線」の再生を呼びかけるが、代議員からは左翼エス・エルとマキシマリストの行動に厳しい非難が浴びせられた。県ポリシェヴィキの指導者、ルインディチュは討論をまとめつつ、左翼エス・エルの戦術を左右に揺れる振子に譬へ、その動揺の社会的原因を「小ブルジョワ諸階級とグループの利害を反映するため」と断罪し、次の如く結んだ。

「統一革命戦線について言えば、この統一戦線に存在する。これは共産主義者＝ポリシェヴィキ党の回りに団結した労働者階級と貧農であり、この戦線は共産主義をめざす断固とした闘争の道に立つ誠実な革命家には誰にも閉ざされてはいない。」<sup>3)</sup>

ここでは共産党中軸の階級同盟論が主張され、諸党派の共闘と統一戦線の論理は拒否されているのである。

サラトフ県の左翼エス・エルは七月事件を起こした自党の中央委員会を批判し、ポリシ

2) 7月9日の県ソヴェト執行委員会会議で議長ザビーツキに代って、モスクワから派遣された共産党員 A. Ф. ルインディチュが議長に選出された。ザビーツキは7月11日に逮捕され、彼らの機関紙発行所も閉鎖され、クルスク駐屯三個中隊も武装解除され、まもなく県下の全ての地方ソヴェトから左翼エス・エルは排除された。《Курск》, с. xvi-xviii, прим. 120. №№ 303, 359.

3) Там же, № 367.

表 VI 県ソヴェト大会代議員の党派構成 (1918-1921年)

党派	1918年 1-6月		1918年7-12月		1919年 1-6月		1919年7-12月		1920年		1921年 1-6月	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
共産党員	47.5	47.5	66.1	66.1	56.6	56.6	61.9	61.9	77.3	77.3	74.7	74.7
共産党同調者	4.9		24.2		27.8		13.4		1.3		-	
メンシェヴィキ	1.1		0.2		-		0.1		-		-	
左翼エス・エル	16.8		0.8		0.2		0.2		-		-	
右派エス・エル	2.9	24.5	0.1	4.0	-	5.2	-	4.3	-	0.2	-	0.2
アナーキスト	0.5		0.2		3.2		0.1		-		-	
他党派	3.2		2.7		1.8		3.9		0.2		0.2	
無党派	23.1		5.7		10.4		20.4		21.2		25.1	
計	100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0	

典拠 M. Владимирский, Советы, исполкомы и съезды советов (материалы к изучению строения и деятельности органов местного управления) вып. 2 М. 1921. стр. 6. ヴラヂーミルスキーによって十月革命から1919年までの32県, 117回の県ソヴェト大会, 1920年の33県47回の県ソヴェト大会, 1921年前半の19県19回の県ソヴェト大会, 総計して183回の県ソヴェト大会の代議員27,201名が分析の対象になっている。ヴラヂーミルスキーによるとこの数はロシア共和国で召集された県ソヴェト大会の半数にあたりとされている。Там же. стр. 3.

表 VII 郡ソヴェト大会代議員の党派構成 (1918年-1921年)

党派	1918年 1-6月		1918年7-12月		1919年 1-6月		1919年7-12月		1920年		1921年 1-6月	
	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%	数	%
共産党員	39.9	39.9	43.2	43.2	38.6	38.6	37.3	37.3	40.1	40.1	41.5	41.5
共産党同調者	8.5		29.6		22.7		12.1		2.9		-	
メンシェヴィキ	1.2		0.1		0.1		0.1		-		-	
左翼エス・エル	12.2		3.4		0.9		0.5		-		-	
右派エス・エル	1.2	19.5	0.1	8.9	0.1	4.9	-	5.0	-	0.7	-	0.2
アナーキスト	0.3		0.4		0.3		0.2		-		-	
他党派	4.6		4.9		3.5		4.2		0.7		0.2	
無党派	32.1		18.3		33.8		45.6		56.3		58.3	
計	100.0		100.0		100.0		100.0		100.0		100.0	

典拠 M. Владимирский, Советы, исполкомы..., вып. 2. М., 1921. стр. 10. この表で分析の対象となったのは, 1918-1919年に開かれた1,138の郡ソヴェト大会と, 1920年の369, 1921年前半の144の郡ソヴェト大会, 計1,651の郡ソヴェト大会であり, この数は, 当時のソヴェト・ロシアで行われた全大会の約40%に匹敵する。この大会に出席した190,077名が分析の対象となっている。Там же, стр. 8.

ェヴィキとの共闘を求めた。左翼エス・エルのサラトフ委員会は, 9月25日の代表者会議で「社会革命の勝利のために, ソヴェト・ロシアのあらゆる敵に対してポリシェヴィキとの統一戦線による階級闘争」を行う方針を示し, 「革命的共産主義者党」を創設した<sup>4)</sup>。10月14日にはサラトフ・ソヴェト執行委員会で, 革命的共産主義者党の当地のフラクション結成が宣言されたが, ポリシェヴィキ・フラクションは次のように述べ, 共闘を拒否した。

「名称を変えることにより, 今や「革命的共産主義」の党と自から名のっている党の階

4) К. Гусев, Крах партии левых эсеров, М., 1963, с. 225-6.

表 VIII 県・郡及び市ソヴェト執行委員会の党派構成 (1919年)

党派名	県執行委員会		郡執行委員会		県市執行委員会		郡市執行委員会		総計	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
共産党	349	84.5	2,221	78.9	144	90	128	60.9	2,842	78.9
同上候補	18	4.4	198	7.0	4	2.5	21	10	241	6.7
メンシェヴィキ	-	0	8	0.3	-	0	-	0	8	0.2
エス・エル	-	0	6	0.2	-	0	-	0	6	0.2
アナーキスト	1	0.2	3	0.1	-	0	-	0	4	0.1
その他党派	2	0.5	10	0.4	-	0	2	1	14	0.4
無党派	43	10.4	370	13.1	12	7.5	59	28.1	484	13.5
不明	25		95		1		9		130	
計	438	100.0%	2,911	100.0%	161	100.0%	219	100.0%	3,729	100.0%

典拠 M. Владимирский, Советы, исполкомы и съезды советов..., вып. 1, 1920, с. 7. この表で分析されている資料は、1919年後半に内務人民委員部に届いた18県の執行委員会メンバー438人、26県の郡執行委員メンバー2,911名、10の県市と27の郡市の執行委員会メンバー380人、計3,729人の党派別の資料である。3,729人という数は当時のロシア共和国の執行委員会メンバーのほぼ60%をとらえている。Там же, стр. 3.

級の本質は変りえないと考えて、共産主義者のフラクシオンは宣言を聞き、それへの回答として、全ての小ブルジョワ政党及び分子に対するフラクシオンの態度に自らは変化はないと表明する。<sup>5)</sup>

サラトフ県の郡レベルでも共闘拒否とソヴェトからの他党派排除が強く現れた。1918年11月末のサラトフ郡第四回農民ソヴェト大会では、共産党は「協調に向う時ではない。我々は一步も譲歩しない」と主張し、大会はマキシマリストと革命的共産主義者の反対を押し切って、県ソヴェト大会へは多数派である共産党が提出する名簿に従って代表を選出すると決定した。この決定には革命的共産主義者から「共産主義者=ボリシェヴィキと一諸に勤労者の利益のために抑圧者と闘っているソヴェト与党への乱暴な強圧」であるとの抗議がなされた<sup>6)</sup>。アトカルスク郡では、1919年2月26日～3月3日の第八回郡ソヴェト大会で革命的共産主義者への非難が繰り返され、88名の同党派とそのシンパが大会から排除され、15名の無党派が退場する事態となっている<sup>7)</sup>。サラトフ県では、かくして、「統一戦線による階級闘争」を提唱した革命的共産主義者をはじめ、諸党派がソヴェトから排除され、共産党は1919年初めに県ソヴェトで圧倒的多数を成し、政治的支配を独占するに至った<sup>8)</sup>。

一党制への傾斜・転換が最も明瞭に跡付けられるのはタムボフ県においてである。地方ソヴェト権力の危機のなかで、既に1918年5月末に県共産党協議会は党フラクシオンを

5) 《Саратов》, прим. 137.

6) 《Советы в эпоху военного коммунизма (1918-1921)》, сб. документов, Ч. I. М., 1928, с. 423-4.

7) Там же, с. 434-6. 1918年8月初めの同郡第五回緊急ソヴェト大会では、114名の代議員中、左翼エス・エルが76名を占め多数派を成す勢力を有していた。Там же, Ч. II., с. 401.

8) 1919年1月初めの第六期県ソヴェトの党派構成は、共産党271名、同シンパ96名、無党派22名、革命的共産主義者2名、マキシマリスト3名、アナーキスト1名、党籍不明14名であった。《Саратов》, прим. 121.

通じてソヴェトに強い統制を行う方針を示していたが、七月事件後に左翼エス・エルとの共闘拒否の方針を確定している。7月9日付の県ソヴェト執行委員会指令は、左翼エス・エルを責任あるポストから一時排除するとし、次のように述べていた。

「革命事業にとって恥ずべき中央での左翼エス・エルの進発の故に、又、モスクワ事件に対するタムボフ県ソヴェト執行委員会左翼エス・エル・フラクションの曖昧な態度の故に、本年7月9日の会議で、執行委員会は左翼エス・エルを一時責任あるポストから排除すると決定した。かくして県の全権力は共産主義者＝ポリシェヴィキのフラクションに集中され、タムボフ県の全ての郡郷の執行委員会にその遂行が命ぜられる。左翼エス・エルの陰謀を非難した左翼エス・エルのいる執行委員会では共同活動が許される。」<sup>9)</sup>

さらに、7月末に県の共産党指導者 Ж. Э. Мьерелは「名称がどのようであれ、動揺分子とはいかなる調停も行わない」旨を中央へ伝え<sup>10)</sup>、8月1～5日の第二回県党協議会は、「左翼エス・エルの進出に関する決議」のなかで、「左翼エス・エルの旗の下に隠れている反革命家達」と容赦なく闘うことを全党組織に提案した<sup>11)</sup>。この党協議会は同時に党組織の強化を決定し、その際、次の四点を配慮することを求めている。

「(I) ソヴェト権力の形態で示されるプロレタリア独裁は、その本質からして単一の団結した労働者階級と貧農の独裁である。

(II) ソヴェト権力は地方共産党組織の整序ある組織下でのみ、かつ共産党の指導の下でのみ成功をもって強化される。

(III) 我が党組織の弱さのため、ソヴェトで多数派が《無党派》、《国際派》や《左翼エス・エル》の旗の下で小ブルジョワイデオログの手にあるところでは、ソヴェト権力は自らの反対へ転化している。そして、プロレタリアの組織された独裁のかわりに混沌とアナキー、さらに反革命の勝利さえ導いている。

(IV) …… (省略) ……」<sup>12)</sup>

8月初めの第二回県党協議会は、ソヴェト権力は「プロレタリア独裁」を体現し、「共産党の指導の下でのみ」強化されうるとし、左翼エス・エルをはじめとする他党派や無党派のソヴェトでの活動を危険視し、ソヴェトでの共闘を拒否する方針を定礎したのである。

9月11日に開かれた第三回県ソヴェト大会では、共産党組織のソヴェト機構における役割が強調されつつ、次の5点に及ぶ決定がなされた。

「(I) タムボフ県の領域において、ロシア共産党(ボ)の最高独裁 **верховная диктатура** を宣言する。

(II) 権力代表者の個人的専断には、占めているポストに拘らず、容赦ない闘いを宣言する。

(III) 全てのソヴェト機関と代表者は、ロシア共産党委員会の諸布告と指導者に直接、

9) 《Тамбов》, № 127.

10) Там же, № 134.

11) Там же, №1 38, с. 195.

12) 《Советы в эпоху...》, Ч. I, с. 412. 省略された第四点では、ソヴェトでの党フラクション活動が不充分であり、党委員会から自立していることが批判されている。

服従すること。

(IV) ロシア共産党の郷村組織の指導下で、県の全ての村、部落において貧農委員会へ全権力を移すこと。

(V) 全露執行委員会および第六回全露〔ソヴェト〕大会へ、ロシア社会主義連邦ソヴェト共和国の全領域にわたってロシア共産党の最高独裁を表明することを請願する。<sup>13)</sup>

7月9日の県ソヴェト執行委員会の指令では、「県の全権力は共産主義者＝ボリシェヴィキ・フラクションに集中される」と述べていたが、それは左翼エス・エルの七月事件と関連した一時的緊急措置であった。それが他党と無党派の排除とソヴェトへの「党の指導」という観念を論理的に窮めるかたちで「党の最高独裁」を宣明するに至ったのである。

このようにタムボフ県では、1918年の七月事件後、8月の県党協議会、9月の県ソヴェト大会を通じて一党制政治システムへ急傾斜を示したが、それが一応の成立をみるのは、1919年初めのことである。1919年2月26日から3月1日まで第四回県ソヴェト大会が開かれ、ボリシェヴィキのB. A. ヴァシーリエフの報告をうけ、大会は「組織問題に関するテーゼ」を採択した。これは14のテーゼから成っているが、テーゼ1で、「ソヴェトはプロレタリアと貧農の政治的独裁機関である」と規定し、テーゼ2で、「政治権力機関であるソヴェトは自らの活動において一つの強固な政治綱領に依拠しなければならない、即ち単一の政党によって方向づけられねばならない」と展開し、テーゼ3で、「今やそのような党は唯一ロシア共産党（ボ）である」と帰結した。この政治的に明晰な三段論法を基軸に、「組織問題に関するテーゼ」はさらに党は「ソヴェト活動に対する最高の政治統制 *верховная политическая контроль*」の課題を担い、他方、「ソヴェトの行動方針はロシア共産党綱領を厳格に逸脱せず実施すること」と明記していた<sup>14)</sup>。このような一党制論に対して、「勤労農民によって選出された」無党派グループは、「一党あるいは一フラクションでは県を覆う崩壊に対処するのが困難であり、もしプロレタリアと勤労農民の全ての力が一つの創造的発現に統一されるならば、新しい社会主義的原則の上でソヴェト建設はよりうまく行くであろう」と批判し、より広範な民主的統一と県執行委員会への無党派代表の選出を求めた。しかし、大会で共産主義者の側から「不信、一部の敵対的対応」にあり、無党派グループのこの提案は撤回せざるを得なかったのである<sup>15)</sup>。

タムボフ県では県レベルと並行して郡レベルでも、1918年後半から1919年初めにかけて、地方ソヴェトでの諸党派や無党派に担われる「共闘」関係が崩壊し、一党制政治システムが形成されていった。その形成過程は各郡で多様であるが、モルジャンスク郡とキルソノフ郡に二つの典型的類型が識別される。モルジャンスク郡では、左翼エス・エルの

13) Там же, Ч. I, с. 413.

14) Там же, Ч. I, с. 146-9.

15) Там же, Ч. I, с. 155. 大会に出席した無党派の概数は、大会代議員234名中、決議権を有する者226名で、その内、共産黨員155名、同シンパ49名であるから逆算して、22~30名と推定できる。Там же, с. 153. ヴラジーミルスキーは大会に共産黨員と同シンパ、204名が出席したとし、無党派の人数を指示していないので、無党派は大会を退場したか、排除された可能性もある。М. Владимирский, Советы, исполкомы и съезды советов (материалы к изучению строения и деятельности органов местного управления), вып. 2, М., 1921, с. 23.

みならずポリシェヴィキも中央政府と自党の食糧政策を認めず、郡ソヴェト執行委員会の先頭にはポリシェヴィキのコラブリョーフが立ち、左翼エス・エル、アナーキスト、無党派のソヴェトでの共闘が持続していた。7月10～13日の第5回郡ソヴェト大会では左翼エス・エルが多数を成し、食糧独裁と食糧徴発部隊の組織に関する決議は賛成90、反対123で否決された。共産党フラクションは大会を退場し、大会も52名から成る郡ソヴェト執行委員会も解散された。大会解散後、共産党は県中央から活動家集団を送り込み、15名全員が共産党員から成る郡ソヴェト執行委員会が組織され、共産党委員会に「執行委員会成員の更迭と統制に関する最上権」が与えられた<sup>16)</sup>。このような外部からの強圧によるソヴェト大会と執行委員会の解散を伴いドラスチックに共産党のソヴェトへの統制が成立するコースとは異なり、キルサノフ郡では、左翼エス・エルは七月事件後、共産党の「統制」下に入り、急速に自らの政治的自立性を失い、ソヴェト執行委員会における共産党の排他的独占が達成され、一党制政治システムが成立していく。即ち、七月事件後、ソヴェト執行委員会で左翼エス・エルは共産党の「統制」下で共産党に賛同するとされ、自ら党中央の七月事件の行動を非難する決議を採択し、三名を郡ソヴェト執行委員会に留めつつ、共産党への政治的従属を深めた<sup>17)</sup>。さらに8月半ばには、郡ソヴェト執行委員会は15名全員が共産党員から成り、1919年の第六回郡ソヴェト大会では、共産党をソヴェトに対する「統制機関」と位置づける決議が採択され<sup>18)</sup>、キルサノフ郡での一党制政治システムの形成過程は完了する<sup>19)</sup>。このように郡レベルでも一党制政治システムへの傾斜が急速に進み、コズロフ郡では、既に1918年秋に郡ソヴェト大会が共産党のみで行れると警告され、無党派45名が大会から排除され、ソヴェト執行委員会では共産党フラクションのみが活動し、「ソヴェト執行委員会は問題を既に審議せず、党委員会決定をただ採択する執行機関に転化した」と伝えられる状況が生れていた<sup>20)</sup>。「イスボラートフ体制」として知られたウスマン郡ソヴェトの強い自立性とそれを担ったソヴェト＝党論も、1918年秋に党とソヴェトを分離し、その相互関係を明確化することで、その体制の解消と一党制政治システムへの組み替えが求められることになる<sup>21)</sup>。

このような一連の県郡ソヴェトでの「共闘」の多様な崩壊過程は、地方ソヴェトの政治構造を質的に転換させ、同時に一党制政治システムの形成へ導く過程でもあった。一党制政治システムは、共産党が地方ソヴェト諸機関の党フランクションを通じてソヴェトに対する「統制」と「指導」を独占的に実現する体制として成立する。その「統制」と「指導」

16) 《Переписка》, Т. III, №№388, 410; 《Тамбов》, №153; Хроника революционных событий..., с. 61-2; Т. В. Осипова, Изменение партийного состава..., с. 180-181.

17) 《Тамбов》, №137, с. 183; 《Советы в эпоху...》, Ч. I с. 416-7.

18) 《Советы в эпоху...》, Ч. I с. 410-411, Ч. II с. 395, 398.

19) 七月事件後、エラチマ郡でも、ソヴェト執行委員会で共産党と「密な接触を保ち、今後、行動するとの厳粛な誓約」を行った左翼エス・エルのみを「責任のないポスト」に留めるという方針がとられている。《Советы в эпоху...》, Ч. I с. 418. キルサノフ郡もエラチマ郡も1918年5月末に既にポリシェヴィキによるソヴェトへの統制が強く現れており、《Тамбов》, № 108, с. 152-3. それは、七月事件後の左翼エス・エルの共産党への従属化を通じて確固としたものになっていったといえる。

20) 《Советы в эпоху...》, Ч. I, с. 413.

21) 《Переписка》, Т. III, №418, с. 378, № 428; 《Тамбов》, № 137, с. 184-5.

の政治体系はその成立過程で、まず何よりも、県郡ソヴェトで共産党が圧倒的多数を確保することによって基礎づけられた。地方の共産党組織は他党派や無党派との共闘や統一戦線を頑に拒否し、彼らをソヴェトから排除する志向を示したが、同時に、一党制政治システムの形成過程は共産党の周りに多くの同調者を叫合し、他党派からの転向者を吸引するものであった。共産党の同調者は<sup>22)</sup>、1918年後半から1919年前半にかけて、無党派にかわって地方ソヴェトでの比率を増大し、一党制政治システムの形成に安定的に寄与していた(表VI, VII参照)。左翼エス・エル、マキシマリスト、社会民主党国際派などの、嘗て地方ソヴェトで共産党との「共闘」を担った活動家の共産党への転向も、1918年後半から1919年にかけて大量の現象となった<sup>23)</sup>。ここには、七月事件後に地方ソヴェトで「共闘」関係が崩れ、共産党に対して従属的政治活動を強いられた他党派活動家が、自らの革命運動の場を共産党への転向で開拓しようとした事情があり<sup>24)</sup>、共闘と統一戦線の困難な状況下で、一つの党のなかに共闘と統一の論理を代替的に求めたものといえる<sup>25)</sup>。一党制政治システムは、拒否=排除と転向=叫合の論理を併せもちつつ、地方ソヴェトでの共産党の絶対多数の確保に基礎づけられて成立したのである。

この「統制」と「指導」の政治体系は具体的にはソヴェトでの党フラクション活動によって実現された。共産党以外の他党派のソヴェトでのフラクションは、1918年後半に消滅し<sup>26)</sup>、党委員会はソヴェトの議事日程を確定し、議題を前以って審議・決定し、党フラクションを通じてソヴェトへの「統制」と「指導」を実現することになった<sup>27)</sup>。この過程は

22) 1918年8月に共産党はそれまで存続した流動的な同調者 *сочувствующий* の組織化にとりかかり《Переписка》, Т. IV, с. xii-xiii, 1919年12月の第八回党協議会で新党規約を採択し、党員候補 кандидат 制をとるまで、政治的カテゴリーとしての「同調者」が存続した。Е. Г. Гимпельсон, *Советы в годы...*, с. 66. прим. 28.

23) К. Гусев, *Крах партии левых эсеров*, М., 1963, с. 217-234; А. Ф. Жуков, *Идейно-политический крах эсеровского максимализма*, Л., 1979, с. 129-155; А. В. Совокин, *О партии социал-демократов интернационалистов*, 《Вопросы истории КПСС》, 1967, № 1, с. 82-7. 他党派の共産党への大量の転向の結果、1921年3月の第十回党大会では、出席代議員の実に四分の一が嘗て他党派に属した共産党員であった。Десятый съезд РКП (б). март 1921 года. *Стенографический отчет*. М., 1963, с. 762.

24) 1919年2月20日に開かれたタムボフ県ポリソグレブスク郡ソヴェト大会は「左翼エス・エル排除宣言」を行ったが、そこでは、左翼エス・エルは革命性を失い「その代表者はソヴェトの隊列や大会に出ることができないため……その革命的分子の多くが共産党(ポリシェヴィキ)に合流した」と指摘されている。《Советы в эпоху...》, Ч. I, с. 248.

25) Шестой Всероссийский чрезвычайный съезд Советов раб., кр., каз. и красноарм. депут. *Стенографический отчет*. М., 1919. с. 107-8; 《Восьмой съезд РКП (б) март 1919 года. протоколы, М., 1959. с. 33-4; 《Переписка》, Т. V, № 306, прим. 2, Т. VI, № 241; Е. Г. Гимпельсон, *Советы в годы...*, с. 284; Л. М. Спирин, *Классы и партии...*, с. 198-9, 310-12, 315-6.

26) К. В. Гусев, *Советские историки о крахе партии эсеров*, сб. статей 《Великий Октябрь в работах советских и зарубежных стран》, М., 1971, с. 97.

27) Е. Г. Гимпельсон, *Советы в годы...*, с. 90, 120; 《Симбирская губерния в годы гражданской войны (май 1918 г.-март 1919 г.)》, сб. документов, Т. I, Ульяновск, 1958, с. 12-3, № 55, с. 98-9, №231, с. 305-7. 1919年3月初めのリャザン県党協議会は、ソヴェトの党フラクションを通じてソヴェトを「指導し руководить」, ソヴェトの党フラクションは党委員会の「統制 контроль」下におくことを確認している。См., 《Правда》, №55, среда 12 март 1919 г. с. 4.

地方党組織がソヴェト活動の細部にまで立ち込み、行政業務を混乱、阻害するという現象や、党委員会と党フラクションの間での権限をめぐる軋轢を各地で生むことになるが、党組織は指導・監督機関としてソヴェト活動の細部に介入しない、党フラクションは党委員会に従属するという方向で整序化されていった<sup>28)</sup>。

地方ソヴェトにおける「統制」と「指導」の政治体系の形成過程で、地域民衆の自立的行動に対する否定的認識もまた確定していった。嘗て、革命過程で地域民衆の「スチヒーヤ性」に人民の創造性をみた状況から<sup>29)</sup>、1918年春—夏にその自立性に直面し、革命の担い手としての地域民衆の力量への不信が醸成され<sup>30)</sup>、党の「指導」から逸脱する民衆の動向は否定的に扱れるようになった。この時期に、民衆の自立的行動への不信と否定的認識を土壌にして、他党派や無党派への強い不信と、ソヴェトからの排除志向が現れたのである。第四回タムボフ県ソヴェト大会で、組織問題の報告を行ったヴェシーリエフは、農村では「民衆の暗愚を土壌にして」他党派が跋扈し、「不正常な事態」が生じているとの現状認識を示し<sup>31)</sup>、アトカルスク郡の第一回共産党・貧農委員会大会の決定は「故意に意識的に無党派を名のる人物を革命の敵と表明する」という項目を含んでいたのである<sup>32)</sup>。1919年2月18日にオリョール県党委員会が、オリョール市におけるメンシェヴィキの合法化措置の廃止を決定した際、その根拠は、オリョール市は「町人的・俗物的・官僚的中心」であり、工業プロレタリアはおらず、共産党が依拠すべき社会基盤がないのに対して、地方のメンシェヴィキは「町人的小ブルジョワ住民」の間で有利な土壌をもっているためというものであった<sup>33)</sup>。地域民衆の自立性や他党派、無党派へのこのような不信は、共産党へ糾合された同調者や他党派からの転向党員へも影を及ぼしていた<sup>34)</sup>。

## 結びにかえて

首都の十月武装蜂起の衝撃を受け、各地でソヴェト権力が樹立されていく1918年春までに、地方ソヴェトでは革命諸党派と無党派を結集する「共闘」が自生的に形成された。この地方ソヴェトでの即自的な「共闘」は、中央の人民委員会議を場とするポリシェヴィ

28) 《Переписка》, Т. III, с. xi, № 101; 《Саратов》, № 447.

29) 拙稿「ロシア農民革命の世界—1917年3~7月—」『北海道大学文学部紀要』29ノ2, 1981年, 44頁, 注(6)。

30) 農民を「暗愚な」クラークの影影を受け易い存在とし、工場労働者は「純粋プロレタリア」でなく「半プロレタリア」であるとし、都市住民は「町人的」「俗物的」であるという認識が、1918年後半から1919年にかけて、地方の党とソヴェト活動家を強くとらえるに至っている。《Переписка》, Т. V, с. 325; Т. VI, № 274; 《Власть Советов》, 1919, № 2, с. 20; 《Саратовская партийная организация в годы гражданской войны》, документы и материалы, Саратов, 1958, № 100, с. 118-9; 《Симбирская губерния в годы...》, № 231, с. 298.

31) 《Советы в эпоху...》, Ч. I, с. 148.

32) 《Саратов》, № 409.

33) 《Переписка》, Т. VI, № 329. サラトフ県でもサラトフ市が「クラーク分子の居住する県の町人的な中心」であるとの「地方的条件」を考慮して、メンシェヴィキへの活動規制を中央に求めている。Там же, № 335.

34) サマラ県ノヴォウゼンスク郡ソヴェト大会の「同調者」やカザン県の旧左翼エス・エル共産党員に対する不信を参照せよ。《Советы в эпоху...》, Ч. I, с. 404; 《Власть Советов》, № 28, 15 декабря 1918 г., с. 27-8.

キと左翼エス・エルの連立政権より、広範な諸党派を含み、中央レベルでブレスト講和をめぐる連立が破れた後も存続していた。しかし、1918年春から夏にかけ、地域民衆の自立的動向に直面し、地方ソヴェトでの「共闘」体制は崩壊の兆しをみせ、地方ソヴェト権力は深刻な政治危機に陥った。1918年7月の左翼エス・エルのモスクワ事件を契機に、地方ソヴェトではこの政治危機から「共闘」が清算され、一党制政治システムへ向けて急傾斜し、1919年初めには、地方ソヴェトで、共産党のソヴェトに対する「統制」と「指導」の体系としての一党制政治システムの成立をみることになる。

ロシア革命の政治過程において、一党制政治システムへの志向は、1918年春～夏の地方ソヴェト権力の危機を経た地方から強力に推進された。内務人民委員部のB. チホミーロフは、1918年7月末に、県郡郷のソヴェトが相互に「共和国」の観を呈する「自治自決 *самостийность* のスチヒーヤ的時期」は過ぎ、「地方から、正に下から、正に地方ソヴェト自身から」「統合 *единство*」を求める動きが現れてきたと指摘した<sup>1)</sup>。1918年秋から1919年にかけて、タムボフ県やサラトフ県では共産党組織が「党独裁」を表明し<sup>2)</sup>、一連の地域でソヴェトにかわって貧農委員会や地方党組織が権力を掌握する事態が生れた<sup>3)</sup>。このような地方からの強力な推力は、ソヴェト権力の樹立期に形成された「共闘」を基軸とする地方ソヴェトの相互自立的政治構造を破るものであり、中央の政策的意図をも屢々、越えるものであった。中央では内戦・干渉戦への突入による政治情勢の変化を考慮して、1918年末から1919年初めにかけて、メンシェヴィキとエス・エルのソヴェトでの活動を許容する方針が出されたが、地方ソヴェトはこの措置を無効にし、共産党以外の諸党派を排除する強い志向を示したのである<sup>4)</sup>。

ロシア革命における一党制政治システムはこのような地方からの強力な推力を受けつつ、1919年3月の第八回共産党大会での「組織問題に関する決議」で一応の成立をみる。共産党によるソヴェトへの「統制」と「指導」の政治システムがここで確認され成立したのである<sup>5)</sup>。しかし、この政治システムが有効に機能するためには、一方ではソヴェト機構自体の整序化が求められ、それは1918年7月の第五回全露ソヴェト大会での憲法採択を契機に、「プロレタリア独裁」機関としてのソヴェトの中央集権的位階制的整序化として進行していく<sup>6)</sup>。他方、この政治システムの独占的担い手としての共産党は、1918年半ばから党規律の強化と肅党、党風刷新により流動的な党派性と訣別し<sup>7)</sup>、民衆の自立的運動との境界を明分した。そして地方党組織は、中央の強い指導と中央集権化を強く求めつ

1) 《Вестник народного комиссариата внутренних дел》, № 18-19, 25 июля. 1918 г., с. 21.

2) 《Власть Советов》, № 25, 7 ноября 1918 г., с. 6-7; R. Service, *The Bolshevik Party in Revolution*, p. 101.

3) 《Комбеды РСФСР》, сб. декретов и документов о комитетах бедноты, М., 1933, с. 248; 《Переписка》, Т. V, с. viii, ix; Т. VI, с. ix.

4) Е. Г. Гимпельсон, Из истории образования однопартийного..., с. 20-24; его же, Советы в годы..., с. 279; 《Переписка》, Т. VI, №№ 329, 335.

5) Восьмой съезд РКП (б). протоколы. М., 1959, с. 423-9.

6) 《Вестник народного комиссариата внутренних дел》, №21-22, 26 сентября 1918 г., с. 15; 《Власть Советов》, 1919, № 11, с. 1.

7) T. H. Rigby, *Communist Party Membership in the U. S. S. R. 1917-67*. 1968, Princeton U. P., p. 17, pp. 76-7. この時期に「集会」や「言論」, 「美辭麗句」から「実務 *дела*」へ党風刷

つ書記局を設けその下に党機構を整序化しつつ<sup>8)</sup>、「革命の党」から「統治の党」へ転成していった。このような「ソヴェト」と「党」の機構的整序化を経て、内戦の終了する頃には、地方の政治的第一任者は、もはやソヴェト執行委員会議長から、地方党組織書記に移っているのである<sup>9)</sup>。かくして、地方ソヴェトにおける一党制政治システムへの傾斜とその成立はソヴェト政治史における決定的な転換点となった。革命の焦点は「ソヴェト」から「党」へ転撤し、1919年以降の政治闘争は基本的には「ソヴェト」においてではなく、「党」において、党内闘争として展開することになる。

## The Russian Revolution and the Local Soviets: On the Formation of the One-Party Political System

Katsunori NISHIYAMA

During the revolution and the civil war in Russia the center of revolutionary politics shifted from the soviets to a single party—the Communist Party. This paper analyses the structure of the local soviets, their political crisis in relation to the popular movements, and the manner in which they were brought under the control and direction of the Communist Party in the one-party system. This paper specifically treats the local soviets in the Central Agricultural and the Middle Volga regions in the period between the winter of 1917–1918 and the spring of 1919.

The contents of the paper are as follows ;

Introductory Note

I. Establishment of the Local Soviets

II. Crisis of the Local Soviets

III. Tendency to the “One-Party Political System”

Conclusion.

At the end of October 1917, when the worker and soldier uprising in Petrograd overthrew the Provisional Government, the Second Congress of All Russian Soviets declared that all power should belong to the soviets in localities. The *coup d'état* in the capital had a great impact on the countryside, where local soviet power was established until the spring of 1918. Based on the revolutionary masses, they were independent and self-governing. In the local soviets there prevailed coalitions in support of soviet power, made up of such revolutionary parties and groups as Bolshe-

---

新をはかろうとする発言が多くみられた。См., 《Партия в период иностранной военной интервенции》, М., 1962, с. 64; 《Власть Советов》, № 26, 20 ноября 1918 г., с. 23; 《Симбирская губерния в годы гражданской войны》, Т. I, с. 59.

8) 《Переписка》, Т. III, № 133; Т. IV, №25.

9) R. Abrams, *The Local Soviets of the RSFSR. 1918–1921*. Columbia University Ph. D., 1966, p. 274.

viks, left SRs, SD internationalists, maximalist, anarchists and nonpartisan activists. The coalitions in the local soviets rooted in the political flexibility in this period were wider and stronger than the short-lived bloc of Bolsheviks and left SRs in the central Sovnarkom.

In the spring of 1918 the local soviets were deprived of one of their supporting forces in the cities by the demobilization of soldiers. Then they were confronted with the autonomous tendencies of subgroups of the local populations. The workers in factories drew apart from the soviets on account of the economic collapse and the food shortages. Their strikes and riots flared in May and June in such industrial regions as Nizhegorod and its suburbs, Tula and Briansk. The peasants, dividing out the land among themselves in their communities, also became independent in the summer. They resisted the policies of the state, especially the food policy enforced from outside their communities.

Subjected to the fluctuations of the support of the local revolutionary masses, the local soviets faced a political crisis. The Communist Party although holding first place in the local soviets, lost many of its members and its representatives in soviets. On the other hand, the left SRs holding the second place after the Communist Party gained in political importance owing to the increase of their members and representatives in the local soviets. They began to confront the Communist Party at several important points. The nonpartisans, the third force in the local soviets, also extended their influence in the soviets and were transformed into an unstable political element in them. Under these circumstances, a politically serious split emerged in the local soviets. The Communist Party then began to rebuild its organizations and to bring the soviets under control through the party fractions in them. Late in June the left SRs began to withdraw their members from the executive committees in the several soviets. The crisis of the local soviets became acute in the summer of 1918.

After the Moscow uprising of the left SRs on the 6th of July the communists in the local soviets sought a way out in the formation of a one-party political system. Stubbornly refusing a united front with other revolutionary parties and nonpartisans, they eliminated the opposition groups from the local soviets. The representatives of the other parties and nonpartisans in the local soviets decreased sharply in number. On the other hand the communists, by attracting the political groups who wished to act in concert with them, subordinating these to their own control, and organizing sympathizers around them, gained an absolute majority in the local soviets. The political system under which the Communist Party through its fractions in the local soviets kept the soviets under its "control" and "direction" was built up until the spring of 1919. At the 8th Party Congress in March 1919, a resolution regarding the organizational problem was adopted, wherein the one-party political system was approved.